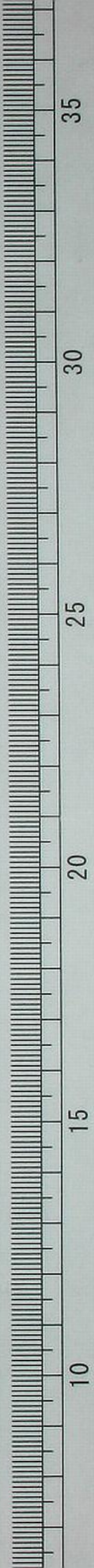
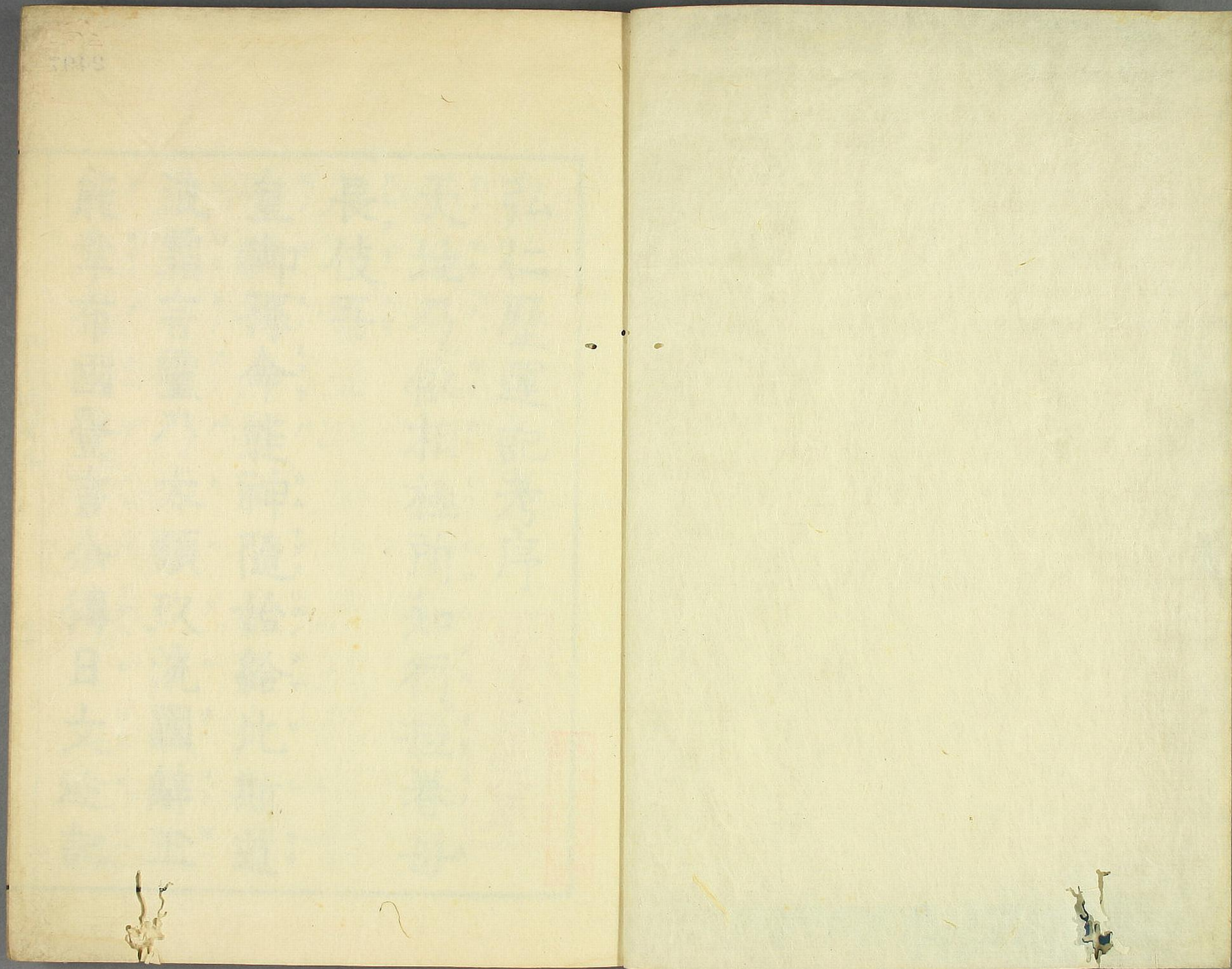


弘仁歷運記考

=5
2163

= 5
2497





弘仁歷運記考序

篠竹司文庫

天地乃依相極所知行挂卷母

畏伎吾

皇御孫命能神隨始給比斯道

波霜言靈乃太須玖流國辭王

能幸布國登言介傳日文迹記

○弘仁歷運記考序

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

氏。大良加爾。穗之玖。天上之儀。
 能麻二介。二。弥繼二爾。言次比。
 語繼比氏。堅石介。常石介。動那。
 玖那母在。祁流乎。三枝乃中津。
 御代介。佐比豆留耶。言痛伎漢。
 書伊渡來而吾。

皇國之古昔人母。漸心佐久自。
 利乍萬其介。習經止斯。互所謂。
 周姬昌云。佐加斯良人。乃偽設。
 多流其赤縣州。乃歷代史能甚。
 遙在空箕空年。紀介麻自許良。
 延互挂麻久波。雖畏。

皇御孫命乃天降坐之從王手

次畝火山余治天下

天皇乃大御代左右百万七十

万何止氣長伎年數記加之與

理空蟬乃在間能物識人母思

迷惑筒其乎真實乃年歷止之

母大船乃信美耶思斯鈞乃字

氣繩受引也為斯

皇典余佐閉書入而在者甚母

由二敷事余那母阿留其所乎

霜吾師神風伊吹屋平大人伊

璞乃年月麻年久慨思保之坐

豆。淺茅原。委曲。余。思。米。具。良。斯。
味。酒。呼。加。牟。賀。倍。明。斯。氏。被。著。
在。此。乃。弘。仁。歷。運。記。考。與。此。有。
愛。伎。御。書。乃。瓢。形。能。天。下。余。伊。
行。經。良。奴。夏。乎。甚。惜。斯。美。思。在。
余。合。世。豆。今。般。岩。崎。長。世。之。氏。

伊。吹。乃。屋。余。乞。申。勢。流。乎。此。書。
善。伎。余。止。宜。須。大。人。乃。命。恐。美。
松。井。美。澄。原。信。好。余。毛。語。比。計。
良。久。爾。魂。相。乍。於。耶。自。心。余。思。
起。斯。豆。頌。氏。如。此。櫻。木。爾。花。令。
開。豆。天。下。余。薰。滿。牟。登。爲。留。者。

信濃國伊那郡麻績里人。

北原信實

身入... 善... 北...

弘仁歷運記者序

掛卷も綾尔畏也。小治田大宮多天下知者。
志。天皇の八年やひし年に。新羅任那那兩
國の酋長等賀奉里し表文也。天上多神安事。
地多天皇何也。是二柱神字除了は。何う亦
畏多事有也。今多祭以後は。船柁乾を多。年
每多必朝貢奉らむと奏物りし形也。誠多遠

津神代の御傳説は幽契^{ムネ}に符合^{カナ}比^ナ多^ク。青海原
 潮の八百重の留る限^{リミ}は戒夷^{エミシ}等は^{ドモ}。天地の共^{ムタ}
 必かく有^ルぬ^レ序^リ理^リありと^シ。然^サる^ニも三粟の
 中津御代と^シ。其諸蕃^{ミヤツコ}の国と^シり。事^ニ物^ヲ
 其善^{ヨキ}と^シ。種^ヲ貢^フ奉^ルと^シは^シ。中^ニは^シ。善事^{ヨキコト}尔^ル
 惡事^{イガコト}の^レ故^ニ。凶事^{イガコト}を^レ吉事^{ヨキコト}の^レ理^ニと^シ有^ルと
 邊^ニ。其上邊^{ウハハベ}の^レ言^{ハシ}善^キと^シ蕃語^{カラコト}と^シ。相率^{アヒヒ}たり^キ相口會^{アヒヒ}

下^{シタ}濁^{ニゴ}きは穢^{ケガレ}惡^シと^シ。穢^{ケガレ}や^レ思^ハは^シ多^ク。數^{アマタ}多^ク
 乃年月^ニ經^ツふ^レ邊^ニと^シ。遂^ニも^シ華夷^{ヒナミヤコ}内外^{ウチノト}の
 差別^{ケガレ}也^ナも^レ分^カら^ズ。萬事^{マンジ}を^レ裏表^{ウラウヘ}と^シ心得^{ココロエ}ふ^レ人^トと
 出來^シは^シ。最^{イト}も^レ歎^{ナガ}し^ク憤^{イキホロ}し^ク極^{キハミ}と^シ。爰^{コゝ}に
 吾氣^{ウケ}吹^ツ舍^ツ大人^{オホタチ}と^シ。故^{ユヘ}鈴屋翁^{スズヤウヂ}の御教^{ミケツ}を^レ受^ケ繼^ツ系^ツ
 也^ナ。其^レ然^シ有^ル法^{ホウ}氣^キ理^リを^レ熟^{ウマ}と^シ悟^{サト}得^ル給^フ比^ナ多^ク。然^シも
 世^ヨ代人^{ドモ}等^トを^レ教^シ導^スと^シ。彼^レ日^ノ没^イ學^{ニシ}西^{ニシ}戒^{ニシ}の^レ

○弘仁歷運記考はしあき

喬國スエに於ては。千典チフミ八千籍ヤチフミと多在オホカるに於ては。淺茅
原スエに於ては。讀明ヨミトモを乞ふ。許多コシラの書等フミドモを
書著カキはし。彼カシ賀託ヨシトも亦イニシ太古イニシに傳説イニシに依る。此
方タの正コトふ古説コトを解明ヨシトを乞ふ。賀中カチに。此書コトは
吾カ。彼スエ喬國スエの説コトを採カる。吾遠津神代カの遙カき紀
年トシ歴ナミの於カる。如カく。詳サカに對照オモさる。如カく。
誠マコトに比類ヒなき考説カムカも亦オホキ多シ。帝道オホキ唯一ヒト形カタ景カ

本教モトツクニを仰尊オホ文フミ。吾徒トモの爲カは言卷コトも更カなる。彼
下濁ケガレ汚ケガレ惡ケガレを染シふ人ヒトも吾カ。其ソノ被清ハミ水キヨ
る。清スガクく如カく。大和魂ニツメの柱イカ代イカ。嚴イカく太カ
築立ウキ居ウキ。上ウエ形カタも至寶タカラの可美書ウミレも叙シ有アる。
斯カクも吾皇大御國ヒは。日刺ヒ方サに天タ。下シタの本津祖モトツクニ
國クニあり。其明徵アカシも如カ斯朗ホカくと見ミえゆ。
如カく。末竟スエも諸蕃ミヤツクニの喬國スエに於ては。年毎トシ

○弘仁曆運記考はし加き ○三ア

子棹サカサネ挽カチ于ホを多。千船八千船ミツチはキを多。朝貢
 奉ア石ナ心タもタ多タ叙タも。阿那樂アはナをタ多タ愉快コくキ後。
 斯カ云イ少ハは。參河國ア渥ツ美ミ郡ヨ吉シ田ダ方ガ鄉タ羽ハ田ダ村ラ多
 鎮シ座ツ坐リ。皇大御神。廣幡八幡大神の兩官ふ
 仕奉る神主。羽田埜常陸敬雄

弘仁歷運記考上之卷

大塵 平篤胤謹撰

門 參 草鹿砥宣輝
 人 河 竹尾正寛
 國 寺部宣光 校 同

是、弘仁歷運記といふ書。印本延喜式の卷首小出さる。其
 撰者も何人ナニを云フこト也。詳サ形カらテ。嵯峨天皇の弘仁シに記シせルは
 書フ形カ依リあリとハ。本文フ。今上弘仁二年辛卯。云フ牙ノ依リ語コハ有
 るル也。明アあリ也。延喜式を奏進ウられシは。延長五年十二月あ
 書キ著スせる記キあり。此レ天保二年辛卯。斯レ題名ノ下ニ。今名ノ公卿
 記キとあり。實ニ小も歷運の事を記シせるは。僅ハ今レ此レ本文ニ引

出は五章れみふて。末は御々代く小官職の沿革あてし事
どを成記して。公卿補任の祖書と云を體裁あて。初と
後をハ似おる如書れり。まこ此記はらよ式ふと與る事形
るべきり非え決米て後人の取副とるれらむ近頃出雲國
守此訂正本小貞高本と云ふり此記を載ざる小據りて此
を首り擧げ考異り收ら故今は其歷運は關り依事れみ交
條くして考を加ふる。此を和漢合運圖に祖書とも云を
き物あるが。其説粗く差誤も多うれど中を和漢を通る
い中珍志た古説をも載とる書あり。次く小説著を成見て
知依るし。いでや靈幸はふ神世に御代の來經なれり。數
にぬる世成とみよきて見む。

一 按本紀等諸書昔者天津彦火瓊々杵尊初從降始王西土
次彦火々出見尊次彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊摠三代經
一百七十九万二千四百七十餘歲竝時世邈遠事迹神異
具于舊記更不煩述。

按本紀等諸書とは古事記。日本書紀等此本紀のみならず
他諸書をも數やに竝る按る由なり。紀字を京極宮御
本よ記を作れど
此を日本紀を始に諸書を云。ちて天津彦火瓊々杵尊に初
て天降坐せる事を説むる先是小天地初發の時とり。
此天皇尊を至依まで大略に説かりては下小致ふる條
條中よゆくて無く聞ゆる事等あり。故先ぞ此事を云

牙より然れど此未カシコ、故是を以て天照大御神を天日此御國
年もまゝ癸丑ふゆ、雲州槌河天を無窮に治看し速須佐之男神。ま於此御國に御坐して四
方八方此蕃國に成併せて盡す志欲し看々也。淵記に曆數
二百三十四万四千六百五十年昔と云る下此本注し自天
照皇大神即位甲寅至今大永三年癸未也と云へる説あり
此歴數を論ふ不足らばと大御神の元年を甲寅と云ふ事
を古傳を兼とる説を聞えて上下小擧る赤縣此古説とも
能く合り其を伊邪那岐神の末年を癸丑ふれど大御神の
高天原を去るし看せる元年須佐之男神の天下を治看せ
る元年共り甲寅より。ちて須佐之男神天上に參上りて大
御神と御誓ひ此中御子生給するを始め種々の事故あ
り。其をゆ天乃壁立極み蕃國に成看行はし御國此地を還
坐して御子阿まゝ生給する中小八嶋篠見神。そ乃御子小

天葺根神。そ此御子小大國主神あり。斯て後須佐之男神
おひる豫美都國に入坐して。月夜見大神と成給す。此大
現世に御坐せる間の年數も皇國小其傳牙洩されど是ま
赤縣に古説ありて人皇氏と稱せるを乃此大神をて天
地二皇小紹きて世に御せる間三千三百歳あるが其元年
を甲寅と見ゆ然れど彼天淵記に大御神の元年を甲
寅とあゆみ熟く合す。ちて須佐之男神此月夜見命と成給
す。此説に従ふるし。牙後を御子八嶋篠見神御孫天葺根神御曾孫大國主神
と次く此御國を去るし看るを順次は有れど此を壽短
紀人世此議小こ有れ須佐之男神の世に御坐せ居間久
々れど御子と御孫も共り御齒高く坐おす。共く此國造す
此事小勞紀給ふ字。須佐之男神。そ成見立多乃ひ大國主神

生坐して後豫美都國ヲ入坐し。此神の御世甲寅元年ハ
夜見國ヲ入ませる年其後大國主神おむ若くて八十神ハ
たまたま癸丑不當れり枉事ハカシ小とて其國ヲ往坐し須佐之男神の稜威の御靈を
受賜はゆ現國小還て給ふと即加ハ八十神ヲ追退々て大
國主クニヌシ也れり給する事の運ハヒなれど須佐之男神ハ次ハ乃大
國主神の御世と申すも誣言ウソコト形らば是を以て大國主神
を直タメ須佐之男神ハ御子と申せ流傳ハもあり。又按ふ須
豫美都國ヲ入坐せる歳ハ癸丑あきハ大國主神ハ御世ハじを也甲寅年ハ不當れ也。ち大國主神ハ
御子言代主神ミコトノミそは嫡子ミヤカミ也して百八十一神あり未と言代
主神ミコトも御子御孫曾孫ミコトノミ也孫ミコトノミ也と數アヒおはして十七世の神

世と申せる傳もある許ハなれも其親族カミヤラもいを多オホ形カタ正ただしあ
や知るく其み形大國主神の功績イサヲを助け奉ツて國造りハ神
業ノサは更マなり謂イハは流經世ハ術治民の用コトモノと流事物コトモノども皆此
大神の御世ミコトノミ制作セし給タマひ大抵世ハ風俗アリサマを赤縣の唐虞以
前サキハ趣サマもぞ開ヒラ多オホすける。今先ハ先サキハ委ツキく説カく候コトハ然シカるリ
此時トキしを高天原タカマノハラ小オホて天照大御神の大詔命オホミコトノミもて豊葦原水
穗國ホノクニハ我オホガ御子ミコトノミ也ニ可治國ミラスベキクニありと詔イサひて天穗日命アマノホヒノミコト武甕槌
命ミコト也。天降アメノリして其大國主神オホクニヌシヲ言問コトヒ多オホまひ。殊コトヲ高皇產靈
神の御言ミコトノミもて汝イニシガ治シラせる現事ウツレコトを皇美麻命スメミマノミコト小治シラし絶イニシ汝イニシを
神事カミコトを治シラせ也。猶ナホ慇懃ネモコ也流御會釋ミミラヒと有アしらば大國主神

諾カクひ坐マて。吾アが治シれる顯明アラハ事は。皇美麻命ミマノノミコ治シラ次ツギをシ。吾アは百
足ヒ交マ。八十ヤソ垺クニ手テ小隱カクて侍サマひ。幽冥カクリ事を治シラむと白シて。長隱トクニ鎮シメ
て給タマひけり。此コト時トキをシて。已マひそかクり号ナ々々。此コト神カミ隱カクを
志シ也。神典カミノミコト有ア。杵築宮シヅノミヤ小と有ア。依ヨる。其コノ本宮ホノミヤと定サて給タマひ
しを。當昔トクノミコト神カミも人ヒト也。打見ウチミしま。純傳ジュンデン説セひて。其コノ八十ヤソ垺クニ手テ
隱カクて侍サマはむ。と白シし給タマするは。遠交トクニ外界カクリに隱カク侍サマはむ。と宣イ
ふ。隱語カクシあるが。垺クニ字ジを説セ文ブ。口クハと書カて。口クハ象シ遠界トクニ也。夙ソク古文
从シ土ツチ作ス垺クニ。郊コウ外ゲ。垺クニ也。見ミえ。集韻シツイン。古文コノコト作ス。向ムカヒ。今文
とる義タマシを以モて。書カ多クるや。其コノ心ココロ比ヒし給タマふ處トコロ也。赤縣セキケン
州シウ也。其コノをり廣ヒロクく。他國タノクニと成ナるも係ケて宜イ牙ガ也。抑ヨク此コノ神カミを。伊邪
那岐イナギ大神オホカミ也。青海原アヲウハハラ。潮シホ之ノ八百ヤホ重ヘを。知チせ。と任ヨサし給タマひし詔命ミコトノリ

蒙カフれる。須佐之男スサノヲノヲ神カミ也。御曾孫ミソトノと坐マて。其功績イサヲを紹坐シウマ以モ故コト
小。今イマ此コノ御國ミクニを。皇美麻命ミマノノミコ小避サリ奉ホウり。既スデに須佐之男スサノヲノヲ神カミ也。見ミ
廻マて坐マて。攝治セツシを給タマひし。赤縣州セキケンシウを始ハジメ。外界トクニを治シラむと
隱坐カクマ志シす。其コノ幽世カクリヨの存トクニ。永久トクニに幽冥カクリ事コトをシ看ミる。皇美
麻命ミマノノミコ也。御前ミマヘに侍サマひ給タマふ御意ミココロをもて。仕奉ツカヘらむと誓ウケヒはせ。依
御語ミコトノリ小也。有ア。依ヨる。其コノは是コレと也。前サキに少毘古那神スサノヒコノカミ外國トクニをシ
來キはして。共ニに國造クニツクリを給タマするが。まゝ外國トクニに渡ワタり坐マせる後ノチ大
國主オホクニノミコ神カミ也。和魂ニギハヤヒ大物主神オホモノヌシノカミの。外國トクニをり還カヘて給タマひし趣サツをシ小
心を潛ヒソカて悟サトり辨ワカる。師説シテひ。八十ヤソ垺クニ手テをシは。八十ヤソと多
云イハる。其コノ心ココロを給タマふ處トコロ也。黃泉ヨミ國クニ也。抑ヨク此コノ神カミを。須佐之
男スサノヲノヲ大神オホカミの御子孫ミコノミコトノリを坐マして。中ナカ比ヒ一ヒトとび。其コノ大神オホカミの坐マる。黃泉國ヨミクニ

○弘仁歷運記考上

○六

は往坐し小依て大なる功をさす。天下を經營給たりしこと。上段より見え。如くみて。今此御國を天神御子に奉て。まこと終り。其國小隱坐あや。渡き理あはらも。事代主神の海底に隱る。其のハ云。ざれども。同く黄泉國小隱れ給ふもの。れり。海嶋に隱居し給ふを謂ふ。ふと。扱ふ。と云る。漢意あり。非あり。を言れ。さるは委ららる。扱ふ。大御國に現世を避坐して。未彼赤縣州に渡坐ぎ。以前も。其親族の有。其盡ひ。交帥坐して。先豐國に伊波比洋ふる。姫嶋に隱住ま。其とて次く。彼處に渡り給ひ。此も師國主神の御末を悉く。此御國に。殘ほまじき道理。ふれを皆黄泉國に避給たり。と有れど。委ららる。予が三五本國考を見て。知。但し。此を。既小隱坐せる。後此事。昭る。故。我が神典小は。其詳ある。傳牙無れど。彼邦の古書と。なり。其履歴い。言。記し。傳牙て。太界伏羲氏と聞えし。は。即是大神に漢名

尔て。其始免て。馭戎し給牙。元年。庚申。歳形。あや。既小春秋命。歷序考。著せ。あや。如し。但し。上。注せる。如く。此大神そ。赤縣。此傳。牙。人。皇。氏。没。拒。神。氏。次。之。と。有。る。拒。神。氏。此元年。と。同。年。ある。が。拒。神。氏。黄。神。氏。次。民。氏。辰。放。氏。離。光。氏。柏。皇氏。と。云。る。六。氏。相。繼。交。て。甲。寅。より。己。未。迄。て。千。六。百。八。十。六。年。此。間。彼。國。に。王。あり。し。字。其。千。六。百。八。十。七。年。小。當。る。庚。申。歳。に。伏羲。氏。の。出。興。せ。由。あり。と。大。國。主。神。に。現。り。御。斯。て。國。を。治。給。へ。る。を。乃。そ。此。千。六。百。八。十。六。年。此。間。形。り。斯。て。其。赤。縣。州。に。渡。り。給。ふ。時。し。己。命。の。世。に。行。ひ。給。牙。る。事。物。器械の類ひ。盡小幽世。尔收免て。其風俗を。赤縣に移し給牙。其。此。後。し。御國を。天神に。御子の御世と。革れ。天。地。御國に。風俗を。行給ふ。事。を。所。思。看。せ。る。故。あ。は。は。し。果して。皇美麻命。御天降の後。そ。御風儀。乃。漸く。小弘。治

りて。古語小言擧せ惣國と云。依如く。天國の純一なる風
移ウツ正キ來ぬる。彼赤縣を。次く小。ちかした方カタヲ開ヒラけし故コヲ。
此方コナタ何事ナニゴトも却カヘして。彼カレとめ後オキレと依サマ様サマ見ミゆきど。此コはし
也。實マコトは。此方コナタ此風土の純固スツコにして。彼方カナク此風土の薄惡ウソクなる
が故ユヘ依サマこを。先師スヂも既スデ爾イ言コトれあるが如ごとし。皇國ミコクを皇美
せる後ノチを。高天原タカマツヒ此風儀フエヲ移ウツ正キむ事コトを。其御ミコト命ノミコト降ツクの時トキヲ。
皇產靈ミコト神カミ此太玉タマ命ノミコト小勅コノミコトヲ御語ミコトノコト小宜コトヨシ率ヒツ諸部シヨ神カミ而シテ供ツク奉マツル如ごとく。
天上アメノ之儀ノミコトとある如ごとく。後ノチまで其儀ノミコトヲ因ユヅリ循ヒ給タマフふを以もつて知し。
べく。尚なほと大國オホクニ主ヌシ神カミの彼カレ邦ヤマト傳ウツ牙ツク給タマフひし事物モノ風儀フエを唐虞タウヨ
此世ココノまで大抵オホテ難ガタか傳ウツはり給タマフきど。其後ノチを擬サマシ聖ミヤコトの徒トコがら
次ツギく小出コトデて。狡意カウイを先マツと名ナ執ツク。道ミチ此故實コノマコトを失ウシ牙ツクる事コトと也。
多オホあり。其は赤縣アカノ太古オホコト。或人ナニカノ問トて云イハく。赤縣アカノを也。同ナニカ大神オホカミ純
傳ウツ牙ツクふを見ミゆし。或人ナニカノ問トて云イハく。赤縣アカノを也。同ナニカ大神オホカミ純
開ヒラて給タマフ牙ツクる形カタらバ。言語コトノも。此方コナタ此を傳ウツ牙ツク交マフを。教化カクガも施ホツし

難ガタな道理ミチ有アルる小。彼カレと此ココと。言語コトノ此甚イダく異コトな依サマを。何ナニぞや。然サ
れむ彼邦カレノを也。此方コナタ此神カミ等ナリの。開ヒラて給タマフ牙ツクめと云イハふも。大國オホクニ
主ヌシ神カミ此御世ミコトノ事コト。事物モノ器械キカク乃ソノ類シひ。皆具ソノはれ也。言イハふも。神
典ミコトノ有アルちる故事コトノ此所見ミたれむ。信ウケられ惣事ソノ也。答コタヘ御國ミコクの
同ナニカじ國內クニノ也。方言クニノとて。異コト有アルるが多オホ也。況シて神カミ此生ウミ給タマフ
牙ツクる御國ミコクと。潮沫シホナの凝成コリナれる末國スエグニ也。甚イダく隔ヘナま依サマ域イロにして。
其蒼生ヒトノの始ハジメ也。神カミ此生ウミ給タマフると。蠢化ウツクせる也。此差サカヒあれむ。
其言語コトノ此異コト有アルるこ也。固モトとめ訝イタ流ナリ足タラらば。神カミを禽獸トリノの語コト
をさ牙ツクり知し。給タマフ牙ツクバ。其蠢民ウツクノら。我語カラサヘリの依サマ。小。其意ココロを知しめ
て音語ネゴを用ツクひ。文字ブツをも制ツクして。其國風クニノの語法ゴフ也。定サダめ給タマフ

ひし故牙。彼を此と言語の甚く異れるれ也。但し赤縣
餘の国くも皆我が大神とち此御徳ふをりて立ざる國を
有と無れど其言語を各異れり然れど其國は未だ教
牙導き給牙るこそ神は恵みの禽獸まぞみ及
る事をし思はむ人を疑ひ有はじくまき
神は御世ふ。事物風俗も何れ大に開々在しを謂ふを我
が神典牙。然る故事は所見あしをて疑ひ思ふを然る事あ
がら上ふ云依如く。赤縣州あり。伏羲氏と聞ゆる多。大國主
神ある哉。天文。地理。度量。文字。易曆を始え。民用を網紀を
き道を悉そ此制作あるを。彼國籍とてよ所見とめ。此は
彼方牙傳ハる説は依故牙。其國あり有りし事は如く傳と
れど。實を此方牙。制作し給牙る哉。持て渡り給ひしも多

ら依こそ疑あし。其も龜ト易道とも小我が神典ある。太兆
が原始ある事と。三易由來記はと太界古易傳云ひ度量
此我が古尺を減じて傳牙給ひしと起れる事は。赤縣度
制考小論ひ。曆算を皇國に域牙ある創り給し事を。三五本
國考。また天朝無窮曆論牙る小准牙。其餘の事等。此原
始。城も想ひ量り。考の附録と。ちて大國主神を。て小
をる。古銅器此考をも合せ見るを。し。ちて大國主神を。て小
國。避給ひし。は。高天原。お。天照大御神。は。太子。天忍穗耳
尊。天降坐さむと。其裝束し給ふ間。御子。天津彦火瓊々杵
尊。生給牙。故是御子哉。天降し坐むと請給牙。は。皇孫彦火
瓊々杵尊。は。い。幼稚く御坐せる。即。天日嗣。の高御座。小
坐奉り給ひて。鏡。劔。二種の天璽。及び八尺句瓊。ま。齋庭の
稻穗を依し賜ひ。五部。此神等を支加牙。天降し給牙れ也。

筑紫の日向比高千穂峯に天降著して其處に宮敷坐せる
を今法本文に初從降始王西土と云云牙め。委くは古事記
神代紀古語拾
遺あど哉見斯て彦火瓊々杵尊そは天降坐せし年加の
賜はせし齋庭の穂字御田り作りて其十一月に初免て大
嘗祭あり是ぞ此御祀の起原れ也ける。此を大嘗祭此時
中臣此宜る天神壽
詞の傳り依りて云れ也斯て此年を大歲扱ふ瓊々杵尊
辛酉卯るこを下み委く謂ふを見る也扱ふ瓊々杵尊
そは御齡の末に大山祇神の女木花之咲耶毘賣命哉御覽
ちて其父り乞ふ遣せれども大山祇神歡びて其姉石長比賣
命哉も副て進せ給牙め。此御后問を過々藝命御齡の末
爰り瓊々杵尊そは咲耶毘賣をば一夜婚初れども石長比賣

哉を見畏とて返し給ひしらば大山祇神歎まて二人を並
登て進れる由を石長比賣を使はしむるに天神御子此御命
を堅石常石り坐あ手咲耶毘賣を使しては木花の榮ゆる
ごを榮え坐むと誓ひて進れる也今石長比賣を返して木
花之咲耶毘賣哉のみ留免給牙め天神御子此御壽を木花
のごを脆ひ坐れむを白し給ひて世人の命短折祀事本
あり也神典り見えしに。木花咲耶毘賣は櫻樹の精靈也坐
し石長比賣を石此精靈り坐り給
故り其義をたして此御妻問はしも天神御子此命を立給
ふ始あれむ前り咲耶毘賣を乞給へれども石長比賣を副
てを此比賣哉使はし給ふ事も有むと心問ひ進ら
るゝ命の短くぬき事大山祇神の詛ひり依れる事の如
く解れざるを委らる實は木花を美しけれと盛り短う

○弘仁歷運記考上

○十

く石を醜くけれど無窮ある道理の具はれるを石長比賣
を退々て咲耶毘賣を使給ふる故に其祥の有はるを誓ひ
の驗は非交思ひ斯て木花之咲耶毘賣命也唯一夜婚れ
て生坐せ依御子二柱あり御兄を火須勢理命と申し御弟
は即彦火々出見尊とて太子小御坐たり彦火瓊々杵尊の
崩御せ依後を此尊天比下を所知看して五百八十歳が
ど高千穂宮に御坐せ依そ純御齡の末に御兄火須勢理命
と互に幸易し給ひて御兄の鉤を失ひ給ふる其を甚く
請責して止はれ故せむ方れくて海邊に泣吟ひ給ふれど
鹽土老翁來て相計り無間籠の小船を作して其船に乗
せ參らせて海宮に速く遣奉れる小大綿津見神そ比御

女豐玉毘賣命を婚せ奉りて赤女魚口有ら依彼鉤を
取めて參らせ御兄伏す給ふる種く此術とを教へ奉
りて還し奉り給ひしは其教の如く去て遂に火須勢理
命を治給ふる此火々出見命は是等此事とて城も五百
未形りて云ふ事由も八十歳がちど高千穂宮に坐る御齡に
下論ふを俟るし斯る後にかれ豐玉毘賣命海宮より
來り給ひて前小海宮に姓み給ふる火々出見尊の御子
鶺草葺不合尊を産給ふる然て豐玉毘賣命を遂に海宮に
還し給ひ後小其弟玉依毘賣命を遣せて其御子を養はし
免給ふる葺不合尊成人に給ひて父尊の崩御をむお
と申はも更あり葺不合尊のち小御姨玉依毘賣命後と

たて。御子四柱字生給牙下。彦五瀬命。次彦稻冰命。次三
毛入野命。次神倭磐余彦命。是ぞ本文ヲ謂ゆる。三代
の大略あり。古史傳ヲ注せるを見るべし。此三御
代元年數を。一百七十九万二千四百七十餘歳と云。此
武天皇紀も。天皇此御言と云。如此有れど。此は古事記
の。穂々出見命。高千穂宮。五百八十歳坐。崩御せ給所
純傳。凡そ神代の年數のこ。今是をか。のく。論はむ
は。中く。未し。事思ふ人有るれど。然らば。此も如
此見え。書紀も所見とれど。必等閑。過次。非交。神
武天皇紀。首。自天祖降臨。以逮于今。一百七十九万二千

四百七十餘歳と有。三御代の總て純年數あり。此年數
じく多く。久し。たを。近世。生。か。し。き。人。の。心。を。信。ら
れぬ。事。思。ふ。の。種。の。説。有。れ。ど。も。皆。漢。意。に。か。し。死
形。多。古。傳。に。今。假。り。此。數。を。三。御。代。等。分。ち。て。是。は
一。御。代。大。凡。六。十。万。歳。許。に。あ。る。と。然。る。に。此。は。五。百。八
十。歳。有。る。と。此。と。れ。を。短。し。て。加。純。總。て。此。數。也。甚。く。相
叶。は。さ。ぬ。如。何。と。云。ふ。彼。石。長。比。賣。の。事。あり。父。の
神。此。詛。ひ。申。し。給。ひ。し。由。因。り。至。于。今。天。皇。等。之。御。命。不。長。也
と。有。れ。ど。穂。々。出。見。尊。と。り。此。方。は。御。命。を。形。く。短。く。坐。給
き。理。あり。加。純。詛。言。通。々。藝。命。ハ。關。与。給。は。交。其。御。子。より。御
繼。ぐ。誠。詛。奉。れる。物。あり。篤。胤。云。穂。々。出。見。命。より。以。來。天。皇
命。之。ち。此。御。命。長。く。坐。給。る。事。は。大

山祇神の詛此驗ハ非石長比賣を婚さ俊耶毘賣を
婚給する小因れる驗ハ此御妻問の事とてし如し師説を
未精のら定然まど此御妻問の事とてし如し師説を
事此考牙ハ軋れて妙ある説了余が説也此は因於け
ることは云然きも彼一百七十九万云く此年は多くは邇
も更あり。邇藝命此御世ヲ經過了。穗々出見命も僅了五百八十歳次
小葺不合命は逾短う依る。次小伊波禮毘古命に至りて。
又いと縮了。百三十七歳了。崩坐しふ。加れは。
此御年此數のこ。何うは疑ふる。然るを倭姫命世記ふ
ど。後世の書等。神代此年數字。邇々藝命三十一万八千五
百四十三。穗々手見命六十三万七千八百九十二年。葺不
合命八十三万六千四十二年を記せる。いみじ記妄説ふ

神代卷口訣ハ三十一万八千五百三十三。六十三万七
千八百九十二年。八十三万六千四十二年。と分り。此を
少し差あれども三十一万此方の上。一字を脱し。抑三
世小誤りする。亦もを初。云依と同じあをあり。抑三
御代次く。加く御命長く坐む。亦も由あく。由葺不合
命ハ。然ばのめ長く坐る。依小。其御子此神武天皇は。俄了縮
了。僅了百餘歳あ。了。何此由。のせむ。最と心得
了。此よ至了。加純詛言此驗の顯れ。る也。とも云む。然れ
了。二御世殊了。長く坐く。其を過了。後。俄了驗此顯はる
了。依小。非ぎ依をや。篤胤云。神皇正統紀了。天津彦火瓊々
千五百三十三。彦火々出見。尊天。下を治。米給ふ。こと。六十
三万七千八百九十三年。葺不合。尊天。下を治。米給ふ。こと。八
十三万六千四十二年。と云。了。此。尊。八十三万餘年。坐く。了。
其。御子。磐余彦。尊の。御世。よ。了。俄了。人皇。此代。と。あ。了。了。曆

數も短くれりたることを疑ふ人も有べきや。然れど神道の事、たして測るべき。誠り磐長姫の詛言するまゝ。壽命も短く形正しうば。神のぬるまひも替り。頓て人代をありぬるや。や。有り。今此師説す。此義を舎みず云れしれ也。右此年數を。後人の彼書紀此年數を據めて。其を妄す。三御代を分配して。定免たる物にて。彼詛言此事をも思ひ通さ。此記す此の加く五百八十歳を有れど。或も考す。次して。唯ちり無き物も多し。御世の彌益り長久し加す。由よ。祝奉れる心。此三御代の年を合されど。彼書紀形る數をらびぬるを。此の御代の年を合されど。彼書紀形る數を。全く同きを。是後人此所爲れ。証あり。凡て上代此傳を。加く様の事は。必此を彼と。全く八同じからぬ物あまば。此れ也。有也。ま。藤貞幹が。衝口發といふ物。神武天皇紀ある。年數を何ぞ。此を神代總ての數と云。此年

數元より論をる。不足らば。を云しを。鉗狂人論。此年數を。自天祖降臨。以逮于今。とあまば。迹々藝命の天降坐し。よ。以來あり。其上。文小。我。天祖と何るも。迹々藝命形る。て。知。然るを論者。今七代五代を合せて。此年數の如く。云。を誤れ。忍。總耳。命より。以。往の年數を。あ。後。百。万。歳。を。云。こと。を。知ら。然。て。此。年。數。を。論。を。る。不。足。は。何。を。も。て。知。れ。る。不。審。し。凡。て。神。代。の。傳。説。は。み。あ。大。り。靈。異。を。も。て。尋。常。の。事。を。解。釋。を。依。人。も。己。が。心。の。ひ。く。方。の。様。を。云。ひ。曲。て。今。日。此。事。理。を。合。ふ。さ。ゆ。り。説。ふ。以。免。れ。ど。其。を。み。ぬ。漢。籍。意。を。感。ひ。之。私。に。知。る。故。り。然。る。向。今。論。者。の。如。き。ハ。云。曲。る。事。代。の。傳。を。少。し。勝。れ。る。似。之。れ。也。靈。異。を。以。て。此。を。信。ず。る。は。又。同。く。漢。籍。意。を。感。へ。る。物。形。り。此。年。數。を。今。後。其。三。代。等。く。分。ち。と。き。を。一。代。大。と。そ。六。十。万。歳。ば。り。不。當。る。如。く。此。尊。此。年。數。甚。短。く。ま。と。神。武。天。皇。に。至。り。て。逾。斯。の。給。予。る。こ。を。必。然。る。べ。き。故。此。有。こ。と。あり。其。由。を。古。事。記

○弘仁歷運記考上

○十四

傳ふ。詳よ云、ア云れ。まコ此、後ノ上田、秋成と云、る人の、真
幹ガ説ヲ左祖して、此事を論ヲするをト論辨せられル。呵
川ノ葭と云、も、ヲ篤胤ノ天保二辛卯、歳まで、上件ノ師説、何と
形ノ意ハ落カとく、惟ハ惑ヒて在リ、ト依リ、近キ年頃、ト湊ク思
ふ旨趣アアリ。赤縣太古傳ハ選ビよ、勞ク。今年春秋命歴序
考ヲ著セ依リ次ニ。六ノ歴運記考ヲあリ、ハ右三御代ノ
年數ハ事ハ至リアリ。創シて曉リ得ル説アリ。然レバ此、歴
此命歴序考ヲまチ熟ク讀ミて、後ヲ讀ム。其ヲ依リ抄シ、京ハ上田、
まデは、解リ得ルがト記事モ多クるハ。百樹ガ校セる、書紀ノ一古本ハ、彼、神武天皇ハ御語ヲ、皇祖
百樹ガ校セる、書紀ノ一古本ハ、彼、神武天皇ハ御語ヲ、皇祖
皇考ハ乃神ハ乃聖ハ積慶重暉多歷年所ハ、自天祖降跡ヲ以テ逮テ今ニ、一
十餘ノ而遼邈之地ハ、猶モ未ダ霑ル於王澤トやうハ、細注ト爲スる本
歳

有リ。此ハ伴信友ガ、京ヲ在ル時ニ、寫シ來ルを、まチ寫
せルれリ。百樹ハ今ハ亡ル人ハ、あレど、實學ハあリひキ無キ人ハ
也。京ヲ見ル人ハ、此ハ有リ、トや、ハ次ラむ。今是二十三字ハ、本文ハ
に、ハ小據ヲアリ考ス依リ。此ハ弘仁ノ後ニ、人ハ、この歴運記
法文字取用シて、神武天皇ノ御語中に、攙入せるハと疑ハふ
也。日本紀ハ延喜ヨリ以來マ、ト文人ハあリ、ト次ク、ハ小文ヲ
改シ加筆ヲもト爲ス、ト正シ、ト史ハ、ト既ニ、ト古史ハ、ト開題記ヲ、ト委曲ヲ
小論ヲ、トは、ト如此ハ、ト惟ハ、ト定ル、ト右年數ノ文ハ、ト一向ニ、ト棄テ取
履シ、ト思フ、トは、ト神ハ、ト怒ラむ、ト人ハ、ト咎ヲ免ルむ、ト心動ス、ト決
免難カ、トれ、ト毎モ、ト加ク、ト苦シ、ト瀨ヲ、トは、ト行ク、ト如ク、ト久ク、ト延ビ、ト古神ヲ
祈リ、ト寢ク、ト依リ、ト夢現ノ間ニ、ト万大數ヲ、ト捨テ、ト千小數ヲ、ト取リ
と告ス、ト依リ、ト小響ヲ、ト聞ク、トえ、トめ、ト此ハ、ト實ニ、ト天保二辛卯年
の九月朔日ハ、ト夜ノ事ハ

て素より神の照覽はし給ふ所あり。此、事此とよ非ぶ。己が考ふるを往く加ふる夢想の事あり。管子の内業心術あど純篇あり。思之、思之又重思之、思之而不通。鬼神將通之。夢心あり。非、鬼神之力也。精氣之極也と云る。加ふる事あり。夢心あり。あは一百七十九万といふ大數を弃て。二千四百七十餘歳と有依。小數字取れと。告と依言りや。覺えて。夜に明る。待あや。机を清免。ほと更ふ。紀年類の書どとを。取竝て考ふる。小ま抄帝王編年記。神武天皇神日本磐余彦天皇辛酉年正月即位。歳五十五。御宇七十六年。自辛酉至丙子畝火檀原宮と有依。御宇に傍り。或七十九年を見え。天神祇王代記といふ書あり。昔天祖天降以來。至神武天皇。合壹百七十九万。二千四百七十九年とあり。此、天神祇王代記といふ書を俟て。然れど書紀及び。今

此本文より七十餘歳と有依を。此七十六年中も七十九年中と云依小同く。神武天皇の御一世代も總と依。常此傳説あり。元より天皇の御語れらぬこと。著明あり。故はと惟ふ。小既云る如く。大國主神とる。太界伏羲氏を加純國籍とる。此古説より。彼地より始て出興し給ふる年を。庚申とあり。此を和漢此紀年を合運して攷ふる。神武天皇の即位元年辛酉より計りて。二千四百一年前此庚申なり。此、事ある命歴序考まよ赤縣太古傳を見て知べし。然依よ其馭戎はしと。皇孫邇々藝命よ。御國を避奉り給ひし年あること。論ひ無く。此純大神の避奉り給ふ依後より。皇美麻命。高天原より。天津日嗣此高御座

尔即坐し天降て此御支度如と種く純事と有るを翌年
辛酉年ふて御天降やめて其春ふて々むを推量ゆぬ但し
推量れる由を次條より云ふ事あり斯て此天降元年と聞ゆる
辛酉年をり神武天皇此即位元辛酉年此前庚申年まで順
小推下せば二千四百年ふて天皇の崩御あり丙子年ま
て計ふれむ二千四百七十六年。綏靖天皇即位此前年己卯
まぶ成神武天皇小係て計ふれむ二千四百七十九年あり
是めて上り引とる帝王編年記の文は此天神祇シカ
王代記の文は由あり古説ゆる事を辨ふなり然れば本
文此小數ある二千四百七十餘歳を天祖降臨辛酉年をり
神武天皇の崩後までを算するは實數の古説あり此を疑

如く。綏靖天皇此御世より推す年數あるが。綏靖天皇より
後の世より計する年數あらむよむ此天皇此御世の年數
をも加すに數ふを死す神武天皇此御世の限りを計する
年數あるは以て弘仁以前此古記より所見々むを歷運記
に撰者適うたれを得て年數の甚く少きを厭事小思ひ
て漢籍どもも太古の歳數を云ふなり然る偽妄の多う候り
働ひて一百七十九万此大數を攙入して神武天皇以前か
此三御代此年數と爲とてしを其後の人にお書紀此分注
る加す後ま本文神武天皇此御語より書連とること疑れ
る。然る中根璋が皇和通曆の附録なる古曆法の發端より
自天祖降跡甲申距神武天皇東征歲在甲寅積一百七十
九万二千四百七十一出于神武天皇之紀距即位歲次辛酉
一百七十九万二千四百七十八算上と記して曆元と爲と

依を彼二十三字の攬入文を信し神武天皇の御語と心得
その餘歲といふを甲寅此一歳有て其前年癸丑と正算
牙し故は天降の元年を甲申とは云ゆ實も一百七十九
万二千四百七十年を癸丑を本と云ふ算ふれど二万九千
八百七十四甲寅を計牙て三十年餘るをほと癸丑より計
ふきど甲申此元年とあれど此を攬入文を欺うれとる誤
ふぞ有はる皇孫邇々藝命此天降元年辛酉とゆ神武天皇
元年辛酉前此庚申とて二千四百年此間を三代亦て知看
せる趣を如何と言ふ其三代此中上下二代此御世の
間此所知あむ小中一代を推及不して知れれど中一
代の御世の間此み五百八十歳を傳はりて上下二代の御
世此間は替牙奉依る紀便ふし古事記よ日子總々出見命
者坐高千總宮伍百八十歳
と有るを師を總とる御齡の事小説れとれど此を本文小
滾く心よあえて視れど高千總宮を坐て御世とろし看せ

る間五百八十歳と云る傳ふて御齡の事非交然れど
其實の御齡此あ長うてし事を申候も更ぬ也
も彼石長比賣を婚さる木花之咲耶毘賣を使はる由縁
亦因りて次く小御命長く御坐ほし記謂師説此如あきむ
今假り神武天皇の御齡此百三十七歳ある小合せて葦不
合命此御齡三百歳餘と見奉り強事あれど姑か此神
皇正統紀よ周穆王此五十三年壬申とり以後按をる小五
十三年は十
四年小改むる然るは穆王が五十三年を辛亥とて壬申
は此此十四年の當れどあり然る小此正統紀のミよ非交
和漢合運圖を始免紀年類此諸書五十三三年を壬申と有
るを赤縣の紀年書どもあるあり記せる誤を受とるある其
本は漢此劉歆が三統歴譜の妄小欺うれし者あ二百八十
り委くハ別り著せは前漢歴志辨を見て知べし
九年ありて庚申小當依年よ此神隱させ坐く死と有る小

據りて姑、去後二百八十九年を葺不合命法御世の間を定
免奉^レ也。但し正統紀も葺不合命の御齡を八十三万六千四
此因^リ記され多^クは、御世を看せる間の年数を謂
得^ル事といひ、姑、やはずは謂^フるなり。其謂^ハゆる壬申を此神
法元年と云ふ。上件の年数をたし下れど、神武天皇此前
る。庚申歳亦至る。然れど此を天皇の中國を平治竟ませ
歳^ヲ筑紫小^テ隠させ給^テ傳^ハる也。古事記書紀小^キ。此事
漏^レれど、當時別^ニ據^ルる書存^リりて、其を取られし説^ハる
る。一向^ニ古事記書紀^ヲ據^ルる意^ハを、神武天皇の筑紫小
漏^レれど、東征をたし坐^セる間^ハ、父^ノ神^ハ此^ノ既^ニ隠^レれさせ給^ヒて、其後
り漏^レれど、餘^ノ書^ヲ存^スるも、少^クうらむ。此傳^ハるま^ニ渡^ク疑^ハる

ふを其事^ハは、其假^ニ定^ムる。元年壬申此前^ニ辛未歳^ヲ彦
も非^ズ交^ハりし。は、其假^ニ定^ムる。元年壬申此前^ニ辛未歳^ヲ彦
總々出見命^ハ末年と云ふ。五百八十歳に上^レれば、壬辰歳
乃至^テ依^テこれ總々出見命^ハ此御世の元年あり。是^ハ赤縣小^ニ
二年といふ歳^ハ當^リり。和漢合運圖等の諸書^ヲ、般^ニ太^ニ甲^ノ十
元年を戊申とし、其十二年を己未とし、共^ニ葺不合尊^ノ
御世^ト爲^スるは、誤^リあり。予^ハ今^ニ此説^ヲを、竹^ノ斯^ニ其^ノ壬辰歳^ヲ
書紀^ハ年^ハ古説^ハ小^ニ從^テ正^ス合運^セるなり。斯^ニ其^ノ壬辰歳^ヲ
前^ニ辛卯歳^ヲ。邇々藝命^ハの末年と云ふ。彼天降元年辛酉^ニ也。
推^シ上^レれど、一千五百三十一年あり。是^ハ邇々藝命^ハ此御世^ニ也。
ろし看^セる年數^ハ多^クなり。此^ハ固^ニ強^ク舉^ルる所^ニ也。ハ云^フる也。
と識^スる人^ハ多^クなり。其^ハ識^ルる由^ハ、惟^ニ定^ムる事^ハ有^キと
三^ニ御代^ノ年數^ハ、二千四百^ニ年^ニ取^ルる由^ハ、惟^ニ定^ムる事^ハ有^キと
か^ノ大山祇神^ノ誓^ヒ此^ノ由^ハ、縁^ヲ知^ル得^テは、止^ム事^ハ得^テ交^ハり
と思^ヒ定^ムるは、有^キに、此^ノ謂^ハるこ^トを、見^ルむ、人^ハい^フる。平心

予想ひ旋らはて如此く。三御代此年歴を。推量で記せれど。
此を御世と云ひ看せ依間の。歳數ふこそ有れ三柱共。そ
此實の御齡を。幾許で坐しおと云。こを絶て。惟ひ寄り奉
依こそ能は。然そ有れど。三柱共。御子生坐せるは。其御
齡の末れ依事。論ひれし。然るも。邇々藝命。そ此天降坐せ
る時を。決絶て。十歳を越給ふは。じ此こを。古史傳。小説明。勢
依如。能るを。まよ玉祥の。ゆみ。神典。此文面。尔て。天降ゆ
て。宮敷。交給ふと。間も。ぬく。御妻。問あ。し。趣。見。れど。此
を。此間。記せる。事。此。記。故。然。は。見。ゆる。形。若。は。六
少。小。文。面。此。如。く。天。降。坐。せる。と。間。あ。く。御。子。生。坐。む。は。

譬。牙。バ。當。時。三。十。は。の。り。此。御。歳。と。爲。ら。む。も。千。五。百。年。餘
で。此。長。支。御。世。此。間。を。御。子。彦。火。々。出。見。命。と。共。し。經。給。ふ。ら
上。り。父。神。の。神。騰。で。坐。て。後。あ。ち。五。百。八。十。歳。此。御。齡。あ。れ。ど。
總。て。は。却。り。て。父。尊。よ。り。御。命。長。く。御。坐。せ。依。理。あ。り。ま。よ。彦
火。々。出。見。命。此。御。子。生。し。給。牙。依。も。神。典。の。趣。ふ。て。は。甚。若。く。
太。子。坐。し。間。の。事。小。や。と。見。ゆ。れ。ど。此。を。三。十。歳。計。で。此。事
と。せ。む。り。其。生。ほ。せる。御。子。甚。不。合。命。を。そ。此。御。祖。父。邇。々。藝
命。を。り。六。百。歳。計。り。御。齡。長。支。御。父。神。の。御。世。を。共。し。經。給。ひ。
そ。が。上。り。三。百。歳。は。の。り。此。御。世。の。加。は。れ。む。此。を。ぬ。く。長。支
御。齡。と。成。免。了。然。て。あ。り。次。く。小。御。命。長。く。坐。む。を。彼。大

山祇神此誓いの御歎^{ウケ}叶^{カチ}は交^{カレ}故^コ是^コをもて。邇々^ニ藝^ゲ命^メ穗々^ズ
手見^テ命^メの御子^{ウミ}生坐^ニせ^ニ依^ル事^トを共^{トモ}す^ルは^ハ依^ル御^ミ齡^ニの末^ハれ^ニ也^{ナリ}とハ
謂^イふ^ニあ^リ。葺^フ不^レ合^ハ命^メ此^ニ。御^ミ子^コ生^ニ給^フひ^シも。晚^{オソ}る^ニ也^{ナリ}。此^ニ準^スず^ル
て知^ル依^ル也^{ナリ}。上^{カミ}に^テ出^スせる^ニ師^シ説^トよ^ク。倭^{ヤマト}姫^メ命^メ世^ヨ記^キに始^ハる^ニ後^{ノチ}世^ヨ此^ニ
を論^ルして^ハ御^ミ世^ヨの^ミ弥^ヤ益^シす^ル。長^{ナガ}久^クし^クの^ミ心^{ココロ}配^ハり^テ非^レ交^ハす^ル。御^ミ子^コ
生^ルを^ハ若^カ死^シ程^ニの^ミ事^{コト}取^ルれ^ル依^ル故^{ナリ}。抑^{ヨク}此^ニ三^ミ御^ミ代^タの^ミ天^{アメ}皇^{ミコ}命^メと^チ
次^{ツギ}く^ハ長^{ナガ}く^ハ成^ルも^トて^ハ來^キる^ニ也^{ナリ}。抑^{ヨク}此^ニ三^ミ御^ミ代^タの^ミ天^{アメ}皇^{ミコ}命^メと^チ
依^ル御^ミ齡^ニ此^ニ末^ハ也^{ナリ}。夫^レ婦^メ此^ニ道^{ミチ}の^ミ晚^{オソ}く^ハ坐^マち^ル事^{コト}由^ヨて^ハ凡^{ソド}人^{ヒト}此^ニ測^ハ
正^タ知^ル依^ル事^{コト}小^チは^ハ非^レざ^レれ^ドも。神^{カミ}世^ヨに^テ神^{カミ}等^ト此^ニ。御^ミ子^コ生^ニ給^フる^ニ
事^{コト}蹟^トを^ハ尋^ムて^ハ熟^シ替^ハふ^ル也^{ナリ}。皇^ミ産^{ムス}靈^レ大^{オホ}神^{カミ}二^ニ柱^{ハしら}の^ミ御^ミ間^マに^テ御^ミ子^コ多^ク
く^ハ生^ニ給^フ依^ル事^{コト}也^{ナリ}。天^{アメ}地^チの^ミ始^ハを^ハれ^ル也^{ナリ}。万^{マン}此^ニ事^{コト}物^{モノ}は^ハ成^ルし^テ終^ハ給^フは

む^ム爲^スま^ニ伊^イ邪^ヤ那^ナ岐^キ伊^イ邪^ヤ那^ナ美^メ二^ニ神^{カミ}の^ミ御^ミ子^コ多^クく^ハ生^ニ給^フ依^ル事^{コト}也^{ナリ}。
素^{モト}と^リめ^ル人^{ヒト}種^{タガ}字^ジ蕃^フ息^シし^テ終^ハる^ニ也^{ナリ}。其^レ人^{ヒト}草^{クサ}小^チ謂^イゆる^ニ造^{ツク}化^カの^ミ御^ミ惠^メ
哉^イ賜^{タマ}は^ハむ^ム爲^ス也^{ナリ}。そ^レ此^ニ神^{カミ}等^トを^ハ生^ニ給^フ依^ル事^{コト}也^{ナリ}。此^ニは^ハ今^{イマ}論^ルひ^テ出^ス
る^ニ交^カ限^リす^ル非^レ也^{ナリ}。そ^レ二^ニ神^{カミ}相^ア諺^{コト}ひ^テ國^{クニ}生^ニ成^ルさ^レむ^ト。夫^レ婦^メの^ミ事^{コト}
八^{ヤチ}百^{ヒャク}万^{マン}之^ノ神^{カミ}哉^イ生^ニ坐^マし^テ然^シして^ハ後^{ノチ}に^テ謂^フゆる^ニ造^{ツク}化^カの^ミ神^{カミ}は^ハち^ニ
を^ハ生^ニ給^フひ^シ事^{コト}此^ニ也^{ナリ}。死^シを^ハ熟^シく^ハ味^ヒひ^テ知^ルり^テ辨^ハふ^ル也^{ナリ}。此^ニは^ハち^ニ
國^{クニ}神^{カミ}小^チして^ハ御^ミ子^コ多^クく^ハ生^ニ給^フる^ニ也^{ナリ}。須^ス佐^サ之^ノ男^ヲ命^メ大^{オホ}歲^{サイ}神^{カミ}大^{オホ}國^{クニ}
主^{ヌシ}神^{カミ}あ^リ。其^レ趣^{ソム}字^ジ察^サふ^ル也^{ナリ}。其^レ子^コ等^トを^ハ皆^{ツケ}國^{クニ}造^{ツク}す^ル事^{コト}也^{ナリ}。よ^ク人^{ヒト}草^{クサ}
を^ハ養^ヤ育^{イク}み^テ給^フ方^{カタ}也^{ナリ}。使^{ツカ}ひ^テ給^フは^ハむ^ム爲^ス也^{ナリ}。生^ニ給^フ依^ル事^{コト}也^{ナリ}。其^レ須^ス
神^{カミ}の^ミ御^ミ子^コと^チ大^{オホ}歲^{サイ}神^{カミ}此^ニ。御^ミ子^コ多^クく^ハ皆^{ツケ}人^{ヒト}草^{クサ}を^ハ養^ヤ育^{イク}み^テ給^フ方^{カタ}也^{ナリ}。功^{イサ}に^テ
神^{カミ}を^ハ珍^メ子^コと^チ擇^セび^テ天^{アメ}下^{カミ}四^シ方^{カタ}の^ミ國^{クニ}人^{ヒト}ら^ハ小^チ恩^{オン}頼^{ライ}を^ハ蒙^カら^シ也^{ナリ}。五^イ
給^フ牙^{キバ}正^タ空^{カラ}有^リ也^{ナリ}。悟^{サト}る^ニ也^{ナリ}。漫^{マン}る^ニ也^{ナリ}。女^メ色^{イロ}を^ハ好^{コト}み^テ給^フ牙^{キバ}正^タ空^{カラ}有^リ也^{ナリ}。御^ミ舉^ケ

○弘仁歷運記考上

○三十一

小そ非ぎ 斯て天神あち此上を思ふ。皇産靈神を除ては、
 其御子。天底立神。亦名角疑魂命はのり。御子多く生坐る神
 多有らば然る小其御子神等みふ皇美麻命小副て降り給
 牙る故思ふ。是よと天下を治給ふ方小使はし給て
 む爲ふ。其古史第四十九段、よと第百三
 神の太子。忍穗耳命。玉依毘賣命。御合はして。御子二柱
 を生給牙る。其一柱を皇孫邇々藝命。此を天下の大皇
 少して。天降し給ひ。是より前。生給牙る一柱を。天火明命
 小坐次を。此神字も。大和國降し置て。後。神武天皇。此
 彼國。征入る。乃ふ時。内と起りて。皇軍を助け奉らし

免給牙る。天火明命。即饒速日命。物部氏の遠祖神。今
 此等此事等を思ひ。う。天津神。とち此色好み給牙る事實
 の。殊。所見ある事。れ。交等を。想ひ合はる。小。此。三御代の。然
 依御齡。此未ふ。夫婦乃道のおはし坐せ依を。天神之御子。小
 坐せむ。惟神。世情遠く。玄家。謂ゆる。守真。此道自然。備
 已坐して。御世間の未まで。其事。此有ぎ。已。大皇統
 字。令嗣。給ふ。る。き。御子。生し。給は。ど。は。有。あ。き。時。を。神。慮。未
 了。了。如。此。晚。く。御子。生。給。牙。る。小。や。空。推。量。已。奉。り。ぬ。但。し。已
 婚。次。と。あ。て。は。其。美。を。感。て。醜。を。恥。ら。ひ。給。牙。る。と。惟。神。此。御
 情。小。て。此。を。神。と。人。も。同。じ。趣。れ。り。然。る。小。て。も。兄。弟。あ。ら。な
 思。牙。ど。當。昔。加。れ。ら。ま。如。此。亦。行。る。き。漢。を。道。理。の。具。は

○弘仁歷運記考上

〇二十二

事をハ一宿爲婚ト有ハ家モ御世情ノはシと渡ラらぬ故ト聞ク
 えて後ハ雄略天皇ハ童女君ヲ一宵ハ七回ハ免シて娠ハし
 免給ハ牙家ハハ事ノ趣ヲ替ヘて聞クゆるハ成モ思ヒ合セて悟ル
る。まカ此ハ御ト延テ交テ申サむモ畏レれド。壽短く成ルぬ
計りハ命短く交ル物ハハ子ハ生シ得ルぬハ命長く故ル。十七ハオ
を思フ命短く交ル物ハハ子ハ生シ得ルぬハ命長く故ル。十七ハオ
れ之ハ依年の内ヲ子ヲ成ス類ト更ニ成ル。蚕ハ多クはシ其生
て忽チ死スハ取ル思ハるハ。壽長き人ノ上ヨリ見テ
ハ最ハ取ル思ハるハ。壽長き人ノ上ヨリ見テ
 但シ葺不合尊之太子神倭磐余彦天皇年十五爲太子四十
 五歲甲寅從筑紫日向宮船軍東征至庚申年平定中國辛

三

酉年正月即天皇位是爲元年總計從天皇元年辛酉至今
 上弘仁二年辛卯合一千四百七十一年也
 神倭磐余彦天皇御年十五小して太子也あり給ひ。四十五
 小あり給牙家甲寅歲。日向宮成發坐して庚申歲まで小
 中國を平定免給ひ。辛酉年小皇位了即坐せ家字元年也爲
 次と有る也即御紀と同趣ハ家ガ紀ル也其甲寅年ハ末
 也是年也太歲甲寅也あり此太歲也云ふ也赤縣漢世以來
 此諸書小謂ゆる太歲とハ異レ也赤縣籍小太歲と云ハ事
とりて甚ク誤レれル説あり其を太其をむのし我ガ相識
吳古曆傳ヲ委ク論ヲる哉見ル也其をむのし我ガ相識
 れる。細井真雄ガ説ヲ。天皇命レ御世知看せ家初免也。天地

純諸神モロガミとちふ。御饗奉るミマタマツ。大嘗祭オホニヘマツリといひ。此御祀ミマツリありし年
哉。御世ミヨ此始オホトシ也。太歳オホトシと云ふ。これ元年ミヨを數カッり出イ始ハり
也。去を太歳オホトシと稱イふ。御世ミヨありし看ミて。始ハりて。御田ミタ寄ヨ
を。取ト收ウりて。所聞ミコト食ケし。始ハりて。神等カミナリも奉マツル。已マ給タマふ。年ミヨも。此
を。元年ミヨと數カッりて。次ツギく。許ヨク多シ。此御年ミヨを。經ス。積ツクみ。給タマふ。然シカらば。神
ふ。登ノボき。初年ハツメある。故ユ。稱イりて。太歳オホトシを。ハ。云イ。り。然シカらば。神
武天皇ムスヒノミコ紀キふ。辛酉ツルギ年ミヨ春ハル正月ヒトツキ庚辰ツルギ朔ツキ。天皇ミコ即ツキ帝位ミカドノイシ於ニ橿原宮カシハラノミヤ。是
歳ツキ爲ス。天皇ミコ元年ミヨ也。此コノ記キして。是コノ年ミヨ也。太歳オホトシ辛酉ツルギと無ク。是コノと
少カ前マヘ甲寅ツルギ年ミヨ此コノ所トコロ也。是コノ年ミヨ也。太歳オホトシ甲寅ツルギと有ア。如イカニ何ニ云イふ
小コ。此コノ古事記傳コトワザノトモ十八卷ハチジウマキ初條ハツメ也。五瀬命イツセノミコは。葦アシ不合命フキアヘノミコの第一ハジメ
此御子ミコ坐マせ。父命ウチノミコ崩クニ坐マて。と。此命コノミコぞ。天津日嗣アマツヒノツギを所シロ
知看シメシと。り。け。む。書紀シヨジ小コ。此御ミコ兄ケイ弟ケイ。此御ミコ弟ケイ。五イツの異イある傳トモ。あ
れ。と。此五瀬命イツセノミコを。何ナニ傳トモ。亦モ。皆ミナ第一ハジメあり。

然シカは。磐余彦命イハレヒコノミコも。此コノ時トキに。稻冰命イナヒメノミコ御毛沼命ミケノミと共トモに。此五瀬
命イツセノミコ。奉仕ツカヘして。坐マす。む。五瀬命イツセノミコは。未中州イミナカクシを言向終賜コトムケは。此間コノトキ
了マ。早ハヤく崩クニ坐マて。御業ミケノミ終賜マツルは。磐余彦命イハレヒコノミコ。そ。御業ミケノミを成終ナシマ
了マ。遂ツヒに。天下ツクニ哉ミ知看シメシける。故ユ。彼命カノミコを主ヌシとし。五瀬命イツセノミコを客カケル
爲ナして。次ツギに。云イ。は。あ。り。と。説トカれ。と。如イカニあ。ま。さ。と。太歳オホトシ甲寅ツルギと
有ア。は。彦五瀬命ヒコイツセノミコ。大嘗祭オホニヘマツリありし元年ミヨに。斯カクて。神武天皇カムヤマトノミコ
そ。御心ミココロ字ツキ紹給シメタマひて。功竟給コトマツルひ。後ノチに。大嘗祭オホニヘマツリを爲ナし。給タマふ。
年ミヨ哉ミ指サシして。天皇ミコ元年ミヨを。ハ。書カせ。給タマふ。古コノ傳トモ。書カる。と。此コノ天
命ミコの太歳オホトシと。天皇ミコ此コノ太歳オホトシと。太歳オホトシと。ふ。こ。に。二ニ。所トコロに。有ア。し。を。書
紀キに。撰ヒび。取ト給タマふ。時トキ。始ハりて。太歳オホトシの。と。哉ミ。其コノ隨ス。み。た。ま。は。て。後ノチ
見ミえ。し。大歳オホトシを。ぞ。元年ミヨと。改カめ。給タマふ。れ。と。御ミ。舊コノ。ま。り。働ハひ。て。爲ナす。
天皇ミコ元年ミヨを。断ツグり。給タマふ。は。是コノ所トコロまでは。彦五瀬命ヒコイツセノミコ。此コノ太歳オホトシと

り。數牙云る例はし此殘れる故。即其。そは綏靖天皇紀。元
年春正月壬申朔己卯。神渟名川耳尊。即天皇位。是年也太歲
庚辰。安寧天皇紀。元年七月癸亥朔乙丑。皇太子即天皇位。
是年也太歲癸丑。懿德天皇紀。元年春二月己酉朔壬子。皇
太子即天皇位。是年也太歲辛卯。次々見えさゆ。故是
太歲を一年と數牙て。次々ふ。二年三年を數牙て。崩坐を
て。幾十年をうぞる言ふ。上古に定められたるは。
信り然る言ふ。日本紀。持統天皇。小至迄まで。即位は年
の末。必。是年也太歲某と記され。以下續日本紀
何所。小も。此事を記され。前紀の文例を遺られし物
うと思ふ。然るも非。太歲と云ふ。小代る。年號とい

ふ事。此出來し。故此事。○上り出せる。細井貞雄
説。世在。神曆考。少々草稿。始る物。此
中。小見えし。但し此例。違る如く思ふ。所小有
し。出と。有あり。但し此例。違る如く思ふ。所小有
るは。綏靖天皇紀。即位元年。此前年。于時也太歲己卯。を
有。依と。神功皇后紀。是年也太歲辛巳。即爲攝政元年。と有
る耳。あり。然れども。此を熟思ふ。神功皇后は。應神天皇幼
く坐し。故。此年とて攝政し給ひ。大嘗祭を行ひ給ひし。う
ば。太歲と云ひ。綏靖天皇。即位元年。此前年。昭るは。其庶兄。手
研耳命。そ此御弟。ち伐害ひて。皇位を得むを構牙て。私小
大嘗祭を爲られし。故。然る有依あり。即そ此所。此文。手
歷朝機。故亦委事。而親之。然其王。遂以諒闇之際。盛福自由。草
藏禍心。圖害二弟。于時也太歲己卯。と見え。下。獨卧。于大

牀時、淳名川耳、尊射手研耳命、一發中胸、再發中背、遂殺之。之有る哉、見て知るを、神代紀より天稚彦が事を、吾欲取葦原中國、遂不復命、新嘗休之、時中矢立死と。然れば、御々代々有依り思ひ合せて、此有趣を辨ふを。此元年即位此後、必大嘗祭ありて、其年を太歳と云ひ、去哉一年と、數牙出依始と爲去を疑ふし、其は定はれる例ぬき、唯り太歳を此と言ひて、殊小大嘗祭を行ひ給ふを。記はれざるは、但し天武天皇紀のみ、此例の文を、異位於飛鳥淨御原宮、十二月壬午朔丙戌、侍奉大嘗云々、是年也、太歳癸酉を有るを、彼壬申此御軍の常小異、形る由有りて、即坐る御位を依り故に撰者を、其御子小も坐、此て邇々藝し、は殊り正しく右此如くは書れし形也。命此大御位を、既り云る如く、高天原もて、天照大御神此、即奉り賜ひし故り、大嘗祭のみ、御天降此後、行ひ給ひ、火々

手見命、葦不合命、二御代の太歳は去を、物り所見はれど、此は定れる例を、遇る傳り漏し來れる物あり、かく定まる事傳りざる事は、あむ然れど、神武天皇の日向宮とて發坐志計ふるり違あらむ。甲寅の前年、癸丑までハ、葦不合命此御世、甲寅よりハ、彦五瀬命此御世ありて、其所り太歳を有依り、五瀬命此元年形ることを著く、辛酉年より始て、神武天皇の御世と申せしことを疑れし、若是より前か、此甲寅歳を、て小天皇もて御坐むりは、辛酉歳に至りて、再更り、即位の儀を行ひ給ふる事と成れど、然る事此有るも非也、上り引とる、神皇正統紀より、より二百八十九年後、此庚申も當依年も崩御れ、正しを有る説り據れど、甲寅歳より五瀬命此御位を禪り給ひて、後の

其、天皇元年辛酉、準計漢地年代。當周僖王三年辛酉。周代王八百十八年。自武王元年戊寅至僖王二年庚申。凡十六王。四百六十三年。自僖王三年辛酉至赧王滅年。凡二十王。四百。然則自僖王三年以降。歷九代百五王。一千四百七十一年也。

上、件二節も。本朝の舊説をもて。年歴を推考して。説れらる。是とゆ下三節も。和漢字合運して。推考する説あり。○其、天皇と云。神武天皇を申せり。周僖王をば。彼武王とゆ。第十六代亦立と云。王亦て。諸書亦。まに釐王と云書と云。此王は在治も。竹書紀年亦。攷ふ。依り。庚子とゆ。甲辰まで。僅り五年。ふして。殂せれど。辛酉を無く。其、三年を壬寅亦當れり。然依

り。其、三年を辛酉とし。神武天皇元年亦當依と云。こを。此記のみ非。下は引く。三善清行朝臣此勘文亦も。神倭磐余彦天皇辛酉春正月即位。是為元年。當於周釐王三年と云。ひ。帝王編年記。愚管抄亦と云。神武天皇元年辛酉。當周世第十六代僖王三年也。亦有れど。此を誤あり。宋史外國七皇國此事を記せる所。雍熙元年。日本國僧裔然。與其徒五六人。浮海而至。獻本國職員令。王年代紀各一卷。其年代紀所記云。とて擧る。文中亦。神武天皇即位元年甲寅。當周僖王時。亦。是も見之と云。是も同じ類。此誤説あり。は。て此。僖王此。次。亦。惠王と云。愚管抄亦一説あり。以周惠王十七年辛酉。當之。此説。為吉。當時無相違之故也。亦云。ひ。神皇正統紀。和漢合運圖亦と云。此十七年辛酉。當依と云。依を正し。記。然れど。注

文也。僖王二年と有。戦を。惠王十六年と改。免。僖王三年と有
依を。惠王十七年。を改。米。見。依。元。年。を。戊。寅。と。云。ひ。
ま。其。代。數。年。數。形。と。云。依。説。も。誤。有。れ。ど。此。を。既。り。
命。歴。序。考。夏。殷。周。年。表。形。と。論。ず。れ。ど。此。は。漏。し。ぬ。○。自。
僖王三年以降。歴九代とハ。嵯峨天皇此御世也。彼國の唐憲
宗云。し。ら。時。の。當。れ。を。周。世。と。り。秦。漢。魏。晉。宋。齊。梁。陳。隋。唐
と。十。代。の。至。れ。り。然。る。故。九。代。を。云。依。を。誤。れ。り。百。五。王。を。は。
周。僖。王。と。り。唐。憲。宗。の。至。依。王。者。此。員。形。る。が。是。は。と。相。違。あ
り。然。れ。ど。此。を。後。此。事。の。今。考。一。千。四。百。七。十。一。年。を。
前。條。此。年。數。同。く。周。惠。王。十。七。年。辛。酉。即。神。武。天。皇。元。年。と
り。弘。仁。二。年。辛。卯。即。唐。憲。宗。の。元。和。六。年。の。至。依。年。數。あ。り。此。

數。此。か。く。打。符。ふ。を。以。て。と。神。武。天。皇。元。年。故。周。僖
王。三。年。の。當。依。と。云。ふ。説。は。誤。り。を。明。け。し。上。件
件。論。ず。る。庚。申。歲。を。辛。酉。歲。と。多。神。武。御。世。よ。り。去。て。大。形。る
事。故。あ。り。年。次。私。る。小。就。て。按。ふ。り。元。正。天。皇。紀。養。老。五。辛
酉。年。二。月。甲。午。日。此。所。に。詔。曰。世。諺。云。歲。在。申。年。常。有。事。故。此
如。所。言。去。庚。申。年。各。徵。屢。見。水。旱。竝。臻。平。民。流。沒。秋。稼。不。登。國
家。騷。然。万。姓。苦。勞。遂。則。朝。廷。儀。表。藤。原。朝。臣。奄。然。薨。逝。朕。心。哀
慟。去。庚。申。年。を。也。即。養。老。四。年。あり。此。年。此。八。月。癸。未。日。此。所
之。廢。朝。舉。哀。内。寢。云。今。亦。去。年。災。異。之。餘。延。及。今。歲。亦。猶。風。雲
氣。色。有。違。于。常。朕。心。恐。懼。日。夜。不。休。然。聞。之。舊。典。王。者。政。令。不
便。事。則。天。地。譴。責。以。示。各。徵。或。有。不。善。則。致。之。異。云。く。故。有。政

令不便事悉陳無諱直言盡意無有所隱朕將親覽於是公卿
等奉詔退各仰屬司令言意見とあり。あ本委くは御紀り就
事實を見ても抑去れ歳在申年常有事故と云牙依諺を皇國
知るなりし。抑去れ歳在申年常有事故と云牙依諺を皇國
小いを古丸云ひ來し事昭る故り。世諺云やハ詔牙り其を
上件比如く大國主神此國避て坐せ依年まを神武天皇の
中國を平治ませる年の庚申れてし。奇異符ひて謂ゆ
依革命とも申次るき事故ありし故を以てかく言次ぎ來
れる哉。此御世頃を詠りて凶事あ依年此おや云々む故
尔上小も去る所思し坐て如此詔牙る事と聞えとめ。畏々
此詔曰り宣牙る事ども都て遇然の事小こそ有れ庚申年
の故よは非だそは此事本とる庚申年高天原より御國

を平給ひしハ更あり神武天皇の中國を平給ひしも吉事
あれぞ此吉事の方より云む小を吉年此極みと云る然
は有れど然る詠り此諺りこれ年頃の凶事をたなし合せ
あして如此おも詠り出さる大詔命れいをを畏た筆交聖
應れるこを深く心を扱是とめり百八十年のち醍醐天皇此
潛めて讀味ふをし。昌泰三庚申年小三善清行朝臣此奏進せる革命革命令の議
書といふ物あり。此革命曆部類を辛酉改元此時ごを此
文書ども哉集記せる書尔出る也。此革命部類といふ書そ
臣此奏狀三通と菅家小奉れる狀と四通を善家集より出
せる由尔を記し次を建久此度の諸文哉擧げ二卷を弘長
此度の諸文書三卷を元亨の度此諸文書四卷を永徳の度
の諸文書五卷を嘉吉此度の諸文書形るが延喜以來此勘
文事例と形此五卷中尔是はれり。今其を略文して出さ
本此表題尔を革命勘文を有也。今其を略文して出さ
む小發端尔預論革命議を題して臣清行言天道玄遠聖人

所以罕言曆數幽微緯候以之為誕由是學之者若迂遠傳之者似憑虛臣竊依易說而按之明年二月當帝王革命之期君臣剋賊之運凡厥四六二六之數七元三變之候推之漢國則上自黃帝而下至李唐曾無毫釐之失考之本朝則上自神武天皇而下至天智天皇亦無分餘之違然則明年事變豈不用意乎伏惟陛下誠雖守文之聖主既當草創之期數故即位之初遇朔且冬至之慶改元之後頻呈壽星見極之祥日本紀略云昌泰元年十一月一日丙申朔且冬至諸卿上賀表と見え同三年十二月十二日老人星見と云ひ扶桑略記云昌泰三年此未多是歲老人星見武藏國あぢあり壽星と云依是即是あり天數改運既彰於視聽之間何遑假說於占候之術但變革之際必用于戈蕩定之中非無

誅斬何者帝王革命此周易革卦之變也按革卦離下兌上也離為火兌為金金雖有從革之性非得火則不變故金火合體上下相害戕蕩之理已窮周易革卦此理を説こを盡せるがを以て論するを死は其説叶ハ次然るを離を火を依依を古易も同じくれど兌を辰巳此卦も澤もこそ有れ金も非也然る小此を金を依るを周文が私意をもて西の配せ依り起れる事形り然れを離を兌と相剋する理あるを澤まよと水おろ離火と相射る伏望聖鑒豫廻神慮仁恩塞其雅計矜莊其異圖青眼於近侍推赤心於群雄則封豕之徒自然革面食椹之美終成好音撒亂之時垂其衣裳即戎之運鳴其環珮豈不美乎臣機祥難辨靈易迷獻其丹款雖望飲於白虎之槽驗其玉英恐負責於黃龍之瑞清行誠恐誠

惶頓首謹言。少書記。末小昌泰三年十一月廿一日。從五位上。行文章博士。兼伊勢權介。三善朝臣清行。
れ多り。はこ此時。別り管丞相り呈せる諫書。清行頓首謹言。交淺言深者。妄也。居今語來者。誕也。妄誕之責。誠所甘心。伏冀尊閣殊降寬容。清行昔者遊學之次。偷習術數。天道革命之運。君臣剋賊之期。緯候之家。創論於前。開元之經。詳說於下。推其年紀。猶如指掌。斯乃尊閣所照。愚儒何言。緯候之家。少ハ次。易緯詩緯。あど此說を云ひ。開元之經。少ハ唐此王肇。開元曆紀經。と云。書此事形り。其を下。小も云ふ。を見。て知。る。し。但離朱之明。不能視睫上之塵。仲尼之智。不能知篋中之物。聊以管見。伏添橐籥。伏見明年辛酉。運當變革。二月建卯。將動干戈。遭凶衡禍。雖未知誰是。引弩射市。亦當中薄命。天數幽微。縱

難推察。人間云爲。誠足知亮。伏惟尊閣。挺自翰林。超昇槐位。朝之寵榮。道之光華。吉備公外。無復與美。伏冀知其止足。察其榮分。擅風情於烟霞。藏山智於丘壑。後生仰視。亦不美乎。努力努力。勿忽鄙言。清行頓首謹言。少書れ。少め。末。り。昌泰三年十月十一日。文章博士。三善朝臣清行。謹。上。菅右相府。殿。下。政。所。と。あり。本。書。抑。去。於。朝。小。誤。字。あれ。ど。本。朝。文。粹。形。る。を。校。正。し。て。引。こ。り。臣此。管公。右の諫書。被奉られし事。を。管家曆傳。小。文章博士。三善清行。奉書於管公。諫致仕。此管公。爲右相事。幼主。竝茲。佞臣。察有毀言之難。託災星言之也。と云。依。實。然。依。事。形。る。が。猶。別。り。謂。あり。其。を。此。布。ど。寬平法皇と。昌泰帝也。御父子。此間。御快。ら。慈。故。あり。て。法皇密。り。帝を廢し奉らむ。此

御心あり。菅公も。數そ此事を議す。誘ひ給ふり。兼引奉らば。
法皇も。其事に布し止ほらば。然れど。此哉天皇も。顯はし
白さむ事此畏れど。菅公みぢら。身退りむふ及こ空無
し。空所思し決米て。四度まで上表して。其職を辭し給ふど。
天皇亦は。然る故空しも所知看し給ふ。許し給はば。朕卿を
見依こ空父均し。空さ牙勅牙依大御言此。畏く忝れ。又
辭び白しあすに。御身此難哉。願ひ給はば。漸々。法皇此御
心をも。取直し奉らむ。と爲て。御坐らむ。此。法皇空當
間快うら。法皇此依御企ありて。菅公を誘ひ給ふ事
形。皆諦。此。證。有。り。既。委。玉。禰。此。學。問。此。神。等
を。拜。む。詞。此。所。説。著。せ。る。如。く。ぬ。れ。ど。茲。は。彼。清。行。朝。臣。を
此。を。唯。そ。此。大。要。を。此。み。云。ふ。ぬ。り。

元とり菅公を睦み。其下風小従。牙る人。形る。法皇小。
然る御企ありて。菅公哉誘ひ給ふ事をし。疾察して。此事他
よ漏さむ。日頃菅公を妒。惡。徒。を。構。牙。て。其。
難。此。菅。公。を。歸。せ。む。事。を。危。殆。み。ほ。と。天。子。小。も。然。る。衆。口。此。
發らむ時。發。を。獻。慮。を。廻。ら。し。給。ふ。多。く。諫。奏。し。む。と。欲。ふ。
り。法皇此御事小し有れど。是。は。顯。露。小。白。し。難。く。茲。小。一。
時の權策を按じ出して。神武天皇即位元年此辛酉。形ると。
世小庚申年辛酉。年は。事。故。あ。る。年。あり。を。謂。ひ。子。年。哉。も。凶。
年。此。也。言。次。來。れ。る。諺。の。有。依。を。其。權。策。の。本。據。と。ぬ。し。申。
を。事。故。あ。る。年。形。て。云。ふ。諺。を。元。正。天。皇。紀。此。詔。書。小。見。え。
て。既。り。上。り。引。と。り。子。年。此。諺。は。元。明。天。皇。紀。の。詔。曰。よ。朕。聞。

舊者相傳云。子年者穀實不宜。而天地垂祐。今茲大稔。古賢王
有言。祥瑞之美。無以加豐年。云々。宣仁。革曆部類の例文。此
所く。下出さる。宇佐使。此宣命。云々。世諺。仁庚申。辛酉。乃年
波。天下不靜。須止。從古。傳來。札利。因茲。天慎。美御座。須聞。仁種
種。仁其。徵在。利云。くと。宜。牙。る。易。此。革。卦。の。義。を。せ。り。合。せ。て。
文。何。也。此。等。を。見。て。知。る。し。
革命の大變。まの。革令。革運。あどの。事を。古。記。易。緯。此。説。亦。託
し。此。方。此。故。實。彼。方。此。古。説。う。ち。符。と。依。趣。して。天。皇。を。其。事
と。相。く。明。年。の。事。あ。依。る。き。由。を。知。ち。免。奉。也。管。公。も。其。職
哉。ご。小。退。を。給。は。り。事。小。坐。給。ふ。は。じ。と。思。慮。り。て。作。出。さ。れ
ある。勘。奏。諫。書。小。ぞ。有。々。依。其。を。彼。勘。奏。此。文。の。伏。望。と。云。々
り。豈。不。美。乎。云。は。ら。六。十。九。字。殊。り。切。迫。る。今。や。事。起。依
機。を。見。交。は。書。出。未。じ。此。文。相。る。城。以。て。も。知。る。し。然。依。小。管

公上。件。此。謂。り。依。り。て。其。諫。を。用。ひ。給。ふ。こ。を。能。は。交。黙。止。給
牙。依。間。小。果。して。其。事。も。れ。聞。え。て。時。平。公。を。更。あ。り。管。公。哉
嫌。ふ。人。く。種。々。小。謀。お。ち。上。皇。此。御。企。を。ハ。云。牙。ど。管。公。そ。此
謀。主。と。依。如。く。讒。せ。し。故。不。左。遷。の。事。小。坐。せ。給。牙。り。然。れ。ぞ。
部。類。中。此。文。ど。と。小。清。行。朝。臣。學。通。百。家。譽。被。万。代。勘。奏。之。旨
仰。以。可。信。云。く。は。ら。彼。朝。臣。躬。奉。聖。廟。之。訓。説。而。告。聖。廟。之。咎
徵。符。應。指。掌。殆。似。通。神。云。々。所。見。と。れ。ど。此。を。厭。ま。り。當
時。此。事。跡。を。知。り。て。其。事。跡。を。匿。中。小。覆。せ。て。皇。朝。此。事。實。西
土。の。候。説。を。表。し。立。て。射。多。し。故。り。殆。神。小。通。せ。し。如。く。當
れ。る。不。て。實。を。其。候。説。の。神。相。る。小。非。交。信。義。此。神。を。入。れ。る
る。ぞ。有。は。ら。此。昌。泰。四。年。此。二。月。清。行。朝。臣。再。加。註。革。命。革。令
此。證。文。を。出。し。て。改。元。あ。ら。む。事。を。請。は。れ。と。依。文。あ。り。此。を
善。家。集。小。出。る。由。不。て。革。曆。部。類。此。初。卷。小。擧。り。此。を。後

るに命歴序考ま前漢周文王戊午年決虞芮訟辛酉年
歴志辨を見り知るべし。青龍銜圖出河甲子年赤雀銜丹書而聖武伐紂戊午日軍渡
孟津辛酉日作泰誓甲子日入商郊謹按易緯以辛酉為部首詩緯以戊午為部首然而
本朝自神武天皇以來皆以辛酉為一部大變之首此事在
口未出之前天道口自然符契然則雖有兩說猶可從易緯
也又詩以十周三百六十年為大變易今依緯說勘合倭漢舊
以四六為大變二說雖異年數亦同記神倭磐余彥天皇從筑紫日向宮親帥船師東征誅滅諸賊
初營帝宅於畝火山東南地檀原宮辛酉春正月即位是為元
年當於周釐王三年齊桓公始霸主會諸侯於野事見史記表四年甲子春二月詔曰諸虜
已平海內無事可以郊祀即立靈時於鳥見山中是年周惠王即位元年齊桓公帥諸侯伐蔡蔡潰遂伐楚至召陵謹按日本紀神武天皇
責苞茅此即桓公兵車第一之會也

此本朝人皇之首也然則此辛酉可為一部革命之首又本朝
立時下詔之初在同天皇四年甲子之年宜為革命之證文也
史記して其謂る四六二六數此變事の證とて皇典と漢
史と小出の條辛酉年甲子年純事實を次く小拾ひ擧らま
二六をハ辛酉小ゆれ甲子小まれ二復小を二六百二十年
ゆる哉云ハ四六をハ此も甲子小まれ辛酉小ゆれ四復小
を四六二百四十年ゆる哉云ハ然る小まを甲子小ゆれ辛
酉小ゆれ只一復六十年をも二六と云ハゆを辛酉小まれ
甲子小まれ三復八十年をハ四六と云ハゆを甲子小まれ
胡亂し死故を後此博士とち種々論する説等本據と引れ
ど此を証説小を取る小足さゆを論する小其本據と引れ
る緯候此説の妄ある上を況て其末説ある云も更あ少
其最末小推古天皇九年辛酉春二月聖德太子初造宮於斑
鳩村事無大小皆決太子是年有伐新羅救任那之事十二年

甲子春正月。始賜冠位。各有差。有德仁義禮智信大小。合十二階。夏四月。皇太子肇制憲法十七條。是年隋文帝崩。然則本朝制冠位法令。始于推古天皇甲子之年。豈非甲子革命之驗乎。已上一節。自神倭磐余彥天皇即位辛酉年。至于天豐財重日足姬天皇六年庚申。合千三百二十年已畢。と記し。天豐財重日足姬天皇は大御名なり。六年癸卯。本小七年を有れど。誤寫ふれど正し。其次小治之一節之首。空題して。天智天皇者。息長足日廣額天皇之太子也。讓位於母。天豐財重日足姬天皇及舅天萬豐日天皇十一年間。猶為太子攝萬機。息長足日廣額天皇とハ。舒明天皇此大御名。天萬豐日天皇と云。孝德天皇此大御名あり。位を御母と舅を譲りて。云れしことを能く。當昔此事情。叶牙り。爰與中然れど。此前後。緯候を牽當とる。説をみ。非あり。

臣鎌子連。誅賊臣蘓我入鹿。并父蝦夷。伐新羅。救百濟。存高麗。服肅慎。天豐財重日足姬天皇七年辛酉。秋七月崩。天智天皇即位。當大唐高宗龍朔元年。三年甲子春二月。詔換冠位階。更為二十六階。織縫紫。各有大小。錦山乙亦。有大小。大小中有上中下。是為二十六階。其大氏上者。賜大刀。小氏上者。賜小刀。伴造等。氏上者。賜干楯弓矢。亦定民部家部。夏五月。大唐領百濟將軍劉仁願。使朝散大夫郭務宗等來進表。並獻物。當於大唐高宗麟德元年。已上革命革令之徵。倭漢毫詳不更具載。今年辛酉。謹按自天智天皇即位辛酉之年。至去年庚申。合二百四十年。此所謂四六相乘之數已畢。今年辛酉。當於大變革命之年也。又天智天皇以來。

二百四十年之内。小變六申。凡三度也云々。此云くを約する。天智天皇即位辛酉年より。昌泰三年まで。二百四十年間。形ど此年小有正し事故を擧て。小変此證を為られり。要あは事小も非ざれ。伏望因循三五之運。咸會四六之變。遠履ば抄し出づるあり。大祖神武之遺蹤。近襲中宗天智之基業。當創此更始。期彼中興。建元號於鳳曆。施作解於雷聲。臣清行誠恐誠惶頓首謹言。と書れ多正。末小昌泰四年二月廿二日。從五位上行文章博士。兼伊勢權介。三善朝臣清行上。をあり。是時朝廷亦多清行朝臣。此前年奏進れる議書。此既多諦し。紀驗あゆし。小驚まにはし。坐せむ時の博士等と異議。字謂ふ人更多無く。即是議を用ひ給ふ。其多革曆部類。此延喜元年例と云る所。小昌泰四年辛酉七月十五日甲子有改元事。延為

喜元詔文云。去年之秋。老人垂壽昌之輝。今年之曆。辛酉呈革命之符。云々。八月廿九日戊申。被發遣諸社奉幣使。伊勢石清水。大原野住吉。宣命。被申依逆臣竝辛酉革命。老人星事。改御代之號。為延喜元年之由。云々。あり。清行朝臣。此を形を面目をぞ云。云々。然は有れど。前年此勘奏を元。これ一時の權策。小及び改元此狀を無て。彼勘奏諫書此を右。右此證文。及當れる小。其候説此本據い。の。小。を問する人。くも有る。く。あ。朝廷。其。沙汰ありけむ。故。止。こ。を。得。強。ひ。て。右。證。文。此。勘。奏。を。作。ら。れ。之。正。む。然。れ。も。こ。を。其。言。不。所。み。形。牽。強。証。會。此。説。ふ。を。有。れ。を。下。小。舉。る。大。外。記。師。緒。此。論。を。更。多。り。已。は。之。上。小。色。下。小。も。因。何。る。處。小。往。論。ふ。を。見。て。知。は。て。是。を。り。後。を。村。上。天。皇。此。御。世。り。天。德。五。辛。酉。年。を。應。和。元。年。を。改。名。す。之。此。御。世。を。り。始。免。了。謂。ゆる。甲。子。革。

令小も改元あり。即應和四甲子年を康保元年と爲されし
即部類。天德五辛酉年二月十六日庚辰左大臣以下參入有改元事詔文云忝居握符之名未知取俗之道況此年宋異符臻此歲辛酉革命之符既呈云改天德五年爲應和元年大赦天下云々とあり。此次は後一條
天皇の治安元辛酉年萬壽元甲子年次は白河天皇の永保元辛酉年應德元甲子年次は崇德天皇此永治元辛酉年近衛天皇の天
養元甲子年次は土御門天皇此建仁元辛酉年元久元甲子年次は
龜山天皇の弘長元辛酉年文永元甲子年あり。此時の諸勘文革曆部類小詳ふれは就て見るべし。斯て此弘長元年此度まで此諸道博士
等此勘文まに諸卿の定をサタと小數十通彼部類小擧シと依り
皆一向ミナトモ清行朝臣此勘文ヲ雷同して其證文ヲ引クる緯

候の眞實まに其證例と爲し依事實此當否ヲ然も論ヲ依人
あく唯小彼説を增長せる事此と多クある中ナ後醍醐天皇
此元應三辛酉年ハ大外記中原師緒朝臣此奏進ラれある
勘文ヲ悉理ト依説等ヲ依りける。延喜此御世より此度ニ至
マテハ己ハ小八箇度其議あり
故今其カ改も略文して出シむル勘申今年曆數當革命大變
年否事と題して醍醐天皇昌泰四年文章博士三善清行朝
臣始勘奏辛酉革命之義如件勘文者以神倭磐余彦天皇元
年辛酉雖當部首以今推古之義歟天神地神之代年紀眇遠
所見不詳自神武天皇以降載籍雖多曾以不言辛酉革命之
當否之義ヲ溫漢家之濫觴靈寶王肇等ヲ以黃帝十九年辛酉雖

當節首三皇五帝大同小康之代經典之所載不論曆運之符
瑞兩朝之舊規不分明乎靈實とは本朝見在書目錄雜史家部より帝王年代曆十卷釋靈實撰とある書此説云云ひ王肇をハ是より以前此勘文ども小王肇開元曆紀經と引る書此説云ふ二書共小今傳はらびるく余未そ此書等を見然れと云是と云以前此勘文ども小王肇開元曆紀經云臣謹察帝王之受命必在元甲子之年而或以辛酉為革命或以戊午為革運進退雖異期數略同推年數法或以四六二六而乘之或以十周三百六十歲而推之自元甲子以三乘六為陽乘之一變次以四乘六為陰乘之一變云く引交釋靈實年代曆を周穆王四十二年辛酉以後僖王三年辛酉以前有一甲子之得失然則黃帝十九年辛酉以後三千九百年云く此と所見るを云ふ靈實王肇を小唐代の人と聞えさゆ件朝臣為道之碩儒究算術勘奏之趣遵行之跡差久矣然者何閣本朝之先規可勘異域之年紀乎須以昌泰四年之奏狀為本而彼朝臣者達消息之德計大變之

年其術已絶師説不愜短慮之末愚輒難測其心縱雖有權分
非可指南於昌泰以前者四六二六之乘數年紀已不同以此
術猶可令増減乘數哉否一決仍就常説自昌泰四年至治安元年為二六之年自治安元年至文應二年為四六之年仲年相當革命大變之年欵自文應二年至當年僅以六十年未及二六之年於今年者更不可當革命大變者哉と記し
此一決と云ふ其心裡を辛酉年を革命大變君臣剋賊の凶年を云ふを清行朝臣の新意ありと厭まぞ知れ未愚を以ては其心を測り難しを謙遜して所詮去る昌泰四年小清行此始めて奏せる以來此先規ふれぞ其を本とす殊異域の例を探ぬる事小非と云れしあり
次易緯説有疑難事也題して清行朝臣本勘文云易緯云

辛酉爲革命甲子爲革令鄭玄云天道不遠三五而反六甲爲一元四六二六交相乘七元有三變三七相乘二十一元爲一節合千三百二十年同勘奏曰謹按易緯以辛酉爲節首詩緯以戊午爲節首雖有兩說猶可依易緯也云云就之按之易緯十卷中曾無此文此外有他緯哉否雖勘現在書目錄亦以無所見粗考典籍五經曆算引易說有此文同曆記經歟現在書目録とを寛平此御世勅を奉正藤原佐世朝臣此撰る物小て其頃まて見在せる赤縣籍とと字部類せる目録あり橋本經亮が梅窓筆記より河海抄より日本現在書目錄藤原佐世撰大和室生寺の印ある古本粘葉一冊書肆が買得しを見る小五六百年前此古本小て部門を立て書目あり佐世は藤氏の儒士ある宇多醍醐の朝此人が云云を即此書あり先年持谷望之が京小て直を於けり買もて來しハ即經亮が見し本小て實小も大和室生寺といふ朱印あり余

が本はそ哉寫せる形り題名は日本國見在書目錄と有りて現字形らと正五位下行陸奥守兼上野權公藤原朝臣佐世奉勅撰と署はれり此録此異說家といふ部より易緯十卷鄭玄注を出されど信り此外より易緯の書を有こをあり扱五經曆算とハ同録の曆數家と云る部より五經算二とありる書此事形る法し易緯を今此世より悉傳はれど五經曆算を今存りや亡尚書正義云緯文鄙近不出聖人前賢共疑有所不取也毛詩正義云緯候之說偽多而實少也今就是等之文按其義緯候之說偽謬而實少縱雖本書說文不足爲證矧亦其文不詳彌招疑殆者歟凡聖人之道者與天地合其德與日月同其明與四時合其序應于天心揣於人事轉答徵彰休皇道不遠惟善惟與之故也縱據緯候之說何恐革命哉隨又於今度之辛酉者雖當一元之巡全不及大變之期哉此件の論も理

とる説ふは中より緯書此事小就て其論あり委らるる
其を謂ゆる緯候術數の事こそ取る小足らば其外より古昔
此事實も多く交牙載るる中より故實の確乎とる正説あり
りて一向に捨るべき物非ざる是を以て尚書及び毛詩の正
義小も多く其説を用ひて本文此義を釋り其を所不取
也と云ふ云々其説を有し都て緯書と云ひ無實やハ云はるる
少を云ふ小を知るし都て緯書と云ひ無實やハ云はるる
就ては殊に委き論ひ有れど此を専らし抑勘年當辛酉
之例聖代之初有關基之兆醍醐天皇元年戊午革運之年也
同四年當辛酉土御門院建久九年戊午革運之年即位正治
三年當辛酉龜山院正嘉二年戊午革運之年立太子翌年即
位文應二年當辛酉當今文保二年戊午革運之年即位今年
當辛酉繼體守文之佳例豈非春命之曆數乎凡自延喜以來
皆相當明時之洪基者也明其本而執其中者何必可勞年紀

之當否乎謹所勘申如件元應三年正月廿六日也
云々ハ神武天皇の庚申年小中國を平竟はして辛酉年小
即位ありて戊午年を革運の凶年ありと云ふと醍醐天皇土
御門院其年即位し給ひ龜山院其年小太子り立て
翌年此即位あり當今後醍醐天皇も戊午此年の即位あり
佳例あり然れを革命令革運の說を爲て信する不足
らば云ふ意あり尚古くも謂ゆる革命令革運れど
此年然る佳例あり御代此多うれど其をも皆奉らば
是議論の本旨を白けれとる形り是勘文信小理ある説
糸は有れど是より前建仁元年此度の後京極攝政良經公
此革命仗議記り今度説々雖多皆以不當革命但先例至辛
酉年不論當否必有改元皆以仗議同日也と記しれある如
く此を延喜以來の定例あれど元應三年改めり元亨元

年を爲給する。其時の詔書小曆數當辛酉之年符契稱革命之運。是則出自緯候之新意。非于典籍之舊章。術士之家所著作也。聖人之道。豈可然乎。但與物更始者。恒久之理也。と載させ給ふ由。是時の例文。所見之。師緒朝臣此勘文。緯候此説。難斥せゆを。實然る事。と所聞看せる故。此依詔詞此有し。是より後。永徳元年此度の公卿仗議披。清行之勘文。重訪昌泰之盤。只據革卦之義。不據詩曆之異義。偏取神武之上元。不取黃帝之初元。先達之所爲。後生無間然者。欤。凡變革之儀。當否之論。偏出于緯候之妄誕。未聞聖人之法言。一變之期。縱雖相當。大德之至。何有所懼。矣。災妖不勝。善政。夢怪。不勝。善行之故也。況其不當乎。云。侍從藤原公時。卿の定。辛酉沙汰之盤。鯨者。昌泰。清行之奏。狀。不據黃帝之上元。可取神武之初首。之條。坦然明白。仍以本朝之當否。據詩緯説者。夫緯織伎數之流。偽多。實少。之謂。先賢後儒。雖加

疑難。聊以愚管。強窺理窟。小道可見。未應偏棄。致遠恐泥。不可固執者。欤。云。嘉吉元年。此度の替博士賀茂。在盛。同博士賀茂。在成。形どの勘文。夫捨平王以上。斷神武以下。爲部首者。清行之新意也。遠通物理。克明人道。議論得玄旨。出于天。入乎瀾。相公之事迹。誰欺之乎。而窺彼昌泰之載籍。特匪易説。可檢詩説之證。坦然明白也。云。依類の緯候説。拘をり。交。清行之新意。と。知れる人。此有るも。皆師緒朝臣此勘文。あり。以來。あれ。彼朝臣の説。上。件。此説。等の。嗚。矢。木。鐸。を。ぞ。云。べ。る。也。前醍醐天皇此御世。始は。ゆ。説。乃。後醍醐天皇此御世。乃至。六。七。四。百。二。十。年。ふ。こ。て。其。説。此。か。く。定。は。れる。事。を。奇。寓。と。謂。ふ。也。但。し。此。御。世。も。辛。酉。の。改。元。の。み。小。非。後。龜。山。天。皇。の。弘。和。元。辛。酉。年。元。中。元。甲。子。年。此。時。北。朝。亦。至。後。圓。融。院。此。御。世。也。辛。酉。年。元。中。元。甲。子。年。此。時。北。朝。亦。至。徳。と。改。元。し。給。り。次。を。後。花。園。天。皇。此。嘉。吉。元。辛。酉。年。文。安。元。甲。子。年。次。を。後。相。原。天。皇。此。文。龜。元。辛。酉。年。永。正。元。甲。子。年。お。り。扱。是。次。を。正。親。町。天。皇。の。永。祿。四。年。と。云。年。辛。酉。亦。當。也。同。七。年。は。甲。子。亦。當。れ。と。改。元。あ。く。次。を。後。水。尾。天。皇。の。元。和。

○弘仁歷運記考上

○四十三丁

七年と云ふ年も辛酉の當れど改元あり。そは世の中いよく乱れて此沙汰り及ばざりし故なり。然て同十甲子年小寛永を改元あり。是より革命革命令此改元再興して。聖元天皇此天和元辛酉年。貞享元甲子年。次を櫻町天皇の寛保元辛酉年。延享元甲子年。次を今太上天皇の享和元辛酉年。文化元甲子年と相續きて。必改元し給ふ例とは成れり。此革命革命令云こと。右の如く。清行朝臣此新意を出し。故事形る故り。赤縣此歴史及び会易書類も。此年此改元といふ事。聞ゆる事あり。但し詩の正義。鄭玄が六藝論を引たり。詩緯汎歷樞云。午亥之際。爲革命。卯酉之際。爲改政。卯天保也。酉祈父也。午采芑也。亥大明也。云々。之有るハ。似たる事。明ら。此義ハ是非交。

弘仁歷運記考下之卷

大壑 平篤胤謹撰

門人

參 鈴木重野
河 岩崎兌健
國 竹尾茂樹
校 同

四

今都計。自僖王二年庚申以往。神農元年丁亥以降。則歷二皇五帝三王。摠十代七十九王。加帝摯及昇則二千四百三十四年也。此天皇元年以往。漢地歷年代之數也。

此條を神武天皇即位前此庚申年より以往の年歴を傳ふ。古説あるを殊り慇懃に讀辨ふる。其を傳はる僖王二年は。惠王十七年を改むるを。前條云云。如く。扱神農

は。也。伏義と有、ハ、依を。後人此校意を用ひて。謄寫せる形
ゆ。其、何、成もて知、ふれど。歷二皇五帝三王、摠十代。と云、依
丈、相照して。大れを、知れり。然、るは二皇を、三皇、一皇
を、缺、之、依、語、ふ、多、此、丈、謂、ゆる三皇五帝は、古、説、此、三皇五
帝、非、交、儒、家、此、謂、ゆる三皇五帝、其、三皇を、伏義、神農、
黃帝、成、云、ハ、五帝を、少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜、を、云、牙、り、此、を、周、禮、
ま、之、尚、書、此、孔、安、國、が、傳、ね、ど、本、抄、々、依、説、ふ、也。古、傳、説、の
三皇五帝
を、大、れ、と、殊、ふ、して、三皇を、ハ、天皇、地皇、人皇、を、云、ハ、五帝を、
を、伏義、神農、黃帝、少昊、顓頊、を、云、牙、り、尚、異、説、と、多、う、る、を、
後、儒、此、を、辨、る、之、依、説、を、有、ふ、を、無、し、予、が
三、五、本、國、考、小、委、く、説、明、せ、る、を、見、る、を、
周、の、三、代、を、皆、サ、め、何、此、由、り、三皇と云は、夏、殷、
二皇と云は、
周の三代を皆サ、め、何此由り三皇と云は、夏、殷、
二皇と云は、

謂ふ。上ハ伏義元年丁亥以降を云ひし故。神農黃帝を
指して。二皇と稱す依文あり。今本此如く。神農をらむ
尔。伏義を其上有り有れを。神農の次を。黃帝一皇なる也。豈
二皇と云むや。若例此曲士ありて。二皇を一皇此誤寫と云
はむと欲を。然、之、は、摠、十代、有、依、り、代、數、合、ざ、れ、ば、然、
を、証、の、多、事、也。今、在、る、刻、本、を、見、る、ハ、歷、二皇、五帝、三王、
と、や、う、ハ、二、字、の、多、わ、り、見、ゆ、る、也、筆、者、
於、此、ハ、三皇を、云、ハ、言、此、ハ、あ、れ、を、在、る、が、故、り、誤、り、三皇
と、書、之、る、也、板、本、彫、り、後、り、心、を、な、す、上、此、一、画、を、削、れ、る、
故、り、二、字、の、多、わ、り、見、ゆ、る、也、古、
本、を、何、れ、も、正、去、く、二皇とあり。古、
世、依、所、以、い、の、ハ、言、ふ、り、下、文、ハ、二、千、四、百、三、十、四、年、と、云、
依、を、即、伏義元年と。神武天皇元年ハ至依年數あるが。彼

國籍此妄説と云ふ。伏羲と云ふ周末より至る年數は三十万載と云ふ。始於若于万歳と云ふはるを無と云ふ。然る多年數を比るべき。此と相違少年數なる故なり。神農と書る牙。其二千四百三十四年を。神農元年以降。神武天皇元年以往は年數をせむと。構牙ははふり。何れ校意の甚しきと非交や。上惠王十七年辛酉と云ふ。信王三年辛酉と云ふを始り。次々。惠王を信王と云ふ。紀年を能く。替牙知ざりし。撰者此眞の過失なれど。伏羲を神農を謫寫せは事。過失な非。後人此。おぼを物せる。証妄なること。疑ひあり。○摠十代。七十九王を。二皇五帝と。夏殷周は三代を。摠て十代あるが。其夏殷二代の王等。周を信王まで。十七代を摠ふ。依王。數ふ。此。王等此數。まじり。已分數。牙正して。古史年歴編り載せる。相違あれど。今此

要し非ざれを云は。は。謂ゆる七十九王。注する。帝摠と。昇と。加ふ。と。八十一人なり。は無し。然るを八十三皇と有る。は。其間。此年數を。二千四百三十四年を有は。伏羲元年より。神武天皇元年は前年。庚申は至は年數あるが。此を伏羲元年哉。丁亥より取れる故なり。三十四年は過年あり。實は。命歴序考の註せは如く。伏羲氏。馭戎は元年を。庚申を。謂ゆる丁亥より。三十三年後あり。然れを上。伏羲元年庚申を有る。此年數を。二千四百年と有る。謂ふ。然れど。丁亥と有は。皇朝の傳はは一説あり。僅に三十年は。抵悟なれど。然しも。遠を。訛ふ。非。抑此。年數を。神武天皇元年以往。漢地歴年代は數を爲は。命歴序考の

三墳と元氣論を小據りて致す之は。二千四百餘歳の年數。
まに此考は初條の。一百七十九万二千四百七十餘歳。と有
依小數のみ。實年數也。云依考牙小。慮らば相符合す。
愚心ふそ。甚奇異なる事也。其所思ゆれ。然るを彼命歴序
で考。此記の初條は小數也。實年數也。考を物せる頃ま
た由も得知ら交。後考を著はとて。始めて本月初日此
日の朝明は夢よ。其事を知て。今是四日此日の朝。机をとり
て。初めて神農字を伏羲字の謫寫なる事を知り。然る後小
始め。此二千四百餘歳此説の正しき事を悟れ。故是古説
る故。例は。此心は奇異也。と思ふる也。此皇朝の傳は。其原
此。皇朝の傳は。其原いふ小を替ふは。伏羲を以降。
周末に至る年數也。今傳ハる要々しき漢籍とを。幾万歳
と云はる。無死。甚希しく。此記りかく。二千四百餘歳と

傳牙しは。此小も彼也。後り亡る典故は古説の。遺り佚
去存れる物也。其を彼寛平此御世り。撰し給牙る。見
見え。依中。亦。或。無。書。此。彼。小。此。然。有。れ。ど。此
を。早。く。絶。失。は。多。を。以。て。知。る。也。然。有。れ。ど。此
を。何。事。小。も。典。籍。字。此。に。頼。み。思。ふ。我。等。が。狭。く。智。見。ふ。こ。は
有。き。神。此。御。世。り。也。彼。と。此。を。神。真。と。ち。往。來。也。有。り。
ま。に。人。の。世。と。成。て。凡。人。此。往。來。も。數。有。り。依。事。御。紀。小。も。許
多。見。え。之。れ。を。何。時。也。然。る。年。數。也。聞。傳。牙。語。也。傳。牙。
加。ね。此。を。彼。此。年。歴。を。合。運。し。て。見。依。事。也。最。古。と。て
有。り。て。弘。仁。以。前。此。古。書。小。著。は。し。傳。多。る。也。此。歴。運。記。り。採
り。載。る。故。也。按。本。紀。等。諸。書。と。云。依。小。も。有。依。也。然。る。を。我
が。古

○弘仁歴運記考下

學此徒小見狹支倫多神世此昔をてして彼往來せし
事迹の加し古書ども小甚詳不見え之依を尋ねむも
此と心を得るの事神天皇此御世何れと見ゆ依をも
何と心得たるの邊の事天皇此御世何れと見ゆ依をも
る以前を非交そは仲哀天皇此御世何れと見ゆ依をも
れど然るを登せ望し給ふ國を神の御言を信給は高
て朝廷を是と望し給ふ國を神の御言を信給は高
をれど早く神世須佐之男神の天立りたり外國を巡
り韓國小も至少給ひ少彦名神大物主神此御世大羅國
依傳ありまの仲哀天皇より先皇さち御世大羅國
此人まの仲哀天皇より先皇さち御世大羅國
此韓征の御心の進はさむや其能く知り御坐し故
も韓征の御心の進はさむや其能く知り御坐し故
神此御怒ありしを在や猶ほは是小就て按ふ平城天
古史傳小謂ふを見るはし

皇紀大同四年此所小二月辛亥勅倭漢摠歷帝譜圖天御中
主尊標爲始祖至如魯王吳王高麗王漢高祖命等接其後裔

倭漢雜糅敢垢天宗愚民迷執輒謂實録宜諸司官人等所藏
皆進若有挾情隱匿非言不進者事覺之日必處重科と見え
とめ舊く和漢此歷運を記せ依書此種々有々む中尔多然
依妄書此有之故り此勅あり歷運記を是勅ありて二年
後小成れる書形也後小延喜式小添て傳はれ依を朝廷小
も此記を用ひ給ふ依りこそ

但伏羲氏以前天皇以還年代綿邈史無詳録按帝系譜等
諸書摠歷八代九百六十八萬餘歲既非經史未爲實録聊
復存之以廣異同
此條亦かく伏羲氏以前と有依を以ても前條に神農と有

依事もや伏羲と有し哉。謫寫せることを灼然ふり。其はとく
彼を固より神農と有るむるも、此も必、神農を無くしては、應
ぎ依事なる哉や。然る道理までを思はば、彼の書は、
小の古書に謫文攬入ふと、此は遺れぬは、最も拙を所爲
三皇の天皇氏を申せり。此を春秋命歷序に、天地初立有、天
皇氏と云、依如く古けれを、是より以、還伏羲氏まで、此年數
を、知むを欲ふよ。年代綿邈と遠く、詳に録せ依史取る。其
正説を得ざ依故り。帝系譜等此諸書を按、るに、天皇氏と
り。伏羲の間は八代ありて、九百六十八万餘歳を歴、依由
あれど、此等を經史に非、實録と爲、はる者なり。然れど、

聊、此年數代數を存して、異同、廣むと云、依、帝系譜
此、梁蕭吉が五行大義に、往、引、之れを、古、書、に、有、れ、ど、
其、説、い、ふ、も、信、ら、れ、ぬ、事、あり、皇國、も、早、く、渡、り、故、り、
歷、運、記、の、撰、者、を、見、之、る、由、あり、ど、寛、平、此、見、在、書、目、録、に、此、
書、名、無、れ、ぬ、其、頃、を、絶、え、る、よ、こ、今、ハ、西、土、も、存、り、や、亡、
引、之、る、書、れ、ら、む、を、思、ひ、し、う、ぞ、別、書、と、聞、え、之、り、然、れ、ど、
此、帝、系、譜、の、み、非、也、其、謂、由、る、經、史、に、實、録、と、云、す、之、を、
信、ら、れ、ぬ、他、此、書、に、は、却、り、て、訛、れ、る、説、も、多、に、有、り、
命、歷、序、考、此、此、論、牙、依、が、如、し、ま、之、別、に、著、せ、る、夏、殷、周、
も、見、て、知、は、る、中、昔、頃、と、り、是、歷、運、記、に、働、了、依、り、や、帝、王、
編、年、記、愚、管、抄、神、皇、正、統、紀、ま、之、和、漢、合、運、圖、ま、之、類、ひ、和、
漢、此、紀、年、を、合、運、して、記、せ、る、書、と、は、許、多、あり、然、依、り、神、武、

天皇以前を合運せしむ。皆かた記あり。漢籍等も據る。此共據る不足ら。然れど其後此紀年小。然しを甚し相違れ。其の中も合運圖を古けれ。他書小所見あき故實も往々小見え。抑是書は洛下。雄房日性を云ひ僧ありと見え。光由武德編年集成。慶長十一年八月の下の洛北大商人角倉貞順之が父。吉田光由入道了意俗稱を與七郎と云し者。然る此合運圖はも此二人が新し作れり。物ふ非。後漢明帝永平十年以後皇國を垂仁天皇九十六年と推古天皇二十五年と。後記して本注。兩國年曆雖異。多正依貞元釋教目錄兼抄諸家。和漢年代記矣。と云ひ。觀應元年四月廿五日。按諸本。互に精粗あり。はと大く相違。信友が此合運と校合せ。依互に精粗あり。はと大く相違。此事もあり。按ふ小此合運圖も古く傳はれる物。次々加

筆せ依物形らむと云。今按ふ昔あれむ。印本合運圖此初發。り出せ依。謂ゆる天神七代。地神五代の歷年哉。あゝ小附録し。此度こ此考牙小就て。借集多る。其類書どと此異同を標し。其體裁多令知る。左此如し。○天神七代。國常立尊。國狹槌尊。百億万歳。豐斟淳尊。百億万歳。泥土煮尊。二百億万歳。大戸道尊。二百億万歳。面足尊。二百億万歳。惶根尊。二百億万歳。伊弉冉尊。二萬三千四十歳。地神五代。天照太神。二十五萬歳。忍穗耳尊。三十萬歳。瓊々杵尊。三十一萬歳。彦火々出見尊。六十三萬七千八百九十二歳。鸕鷀草葺不合尊。八十三萬六千四十二歳。印本此倭漢合運圖あり。○法と一本。天神祇王代記。を題せ依書あり。天神

七代。國常立尊。男神。天皇氏。治世五万四千年。國狹槌尊。男神。
地皇氏。治世三万三千六百年。豐斟淳尊。男神。人皇氏。治世九
十二万一千六百年。泥土煮尊。男神。治世。大戸道尊。男神。治世。沙土煮尊。女神。治世。大戸辺尊。女神。治世。
二十三万四百年。面足尊。男神。治世。五万七千六百年。伊弉諾尊。男神。伊弉冉尊。女神。伊弉冉尊。神農氏。地神五代。天照太神。治世九千四百廿八年。瓊々杵尊。千
年也。忍總耳尊。治世八十八万三千九百廿九年。瓊々杵尊。治世。三十一万八千五百四十二年。彦火々出見尊。治世。六十
三万七千八百九十二年。鷓鴣草葺不合尊。治世。八十三万六千四十二年とあり。此を屋代翁此藏書あるが書中より。後花
を。寛正の頃より製れる書に於ける。歴年數の妄を更あり。國常立尊。治世。三皇及び。神農氏。治世。當と依を。此餘り。如

な妄事
り。

○はと一本。日本運上録と題せ依書り。天神七代。國

常立尊。右第一代。謂。無量無邊无始無終不變常住。神代。と記
し。第六代まで。合運圖也。同年數あるが。其數上り。之。合運數
の二字を冠す。第七代。神代。所り。一代二神。治二万三千歲。謂。
天地循環變化常住。神代。と書。地神五代。天照太神。治天二
十五萬歲。自甲子。至癸丑。忍總耳尊。治天三十萬歲。自甲子。至癸巳。瓊々杵尊。
治世。卅一萬八千五百四十三年。自甲午。至丙戌。此。神初而降。化下界。彦火々出
見尊。治世。六十三万七千八百九十二年。自丁亥。至戊午。第四
七千八百九十二年之内。七万三
千八百三十七。戊申歲。盤古王生。鷓鴣草葺不合尊。治世八十
三万六千四十二歲。自己未。至丁未。右三代。謂。下化現量神代。云々。六

温故堂の藏書あり。是より後、人皇と題して神武天皇より。繼體天皇十五年までは御謚の下に即位治世の年數御父の事如く少く記し。繼體天皇十六年より年表して記事あり。正親町院を今上皇帝と擧げ、天正八年庚辰年十一月十六日此記事は同筆あり。いふも當時此書と見え。其後年次々々書繼するに此あり。文體書風共異れり。然れバ。天正本運上。○又一本。多々小年代記と題せる書あり。謂ゆる天神七代を合運圖に同く。然して天照皇太神宮治世五千二十八万七千六百七十年。天忍穗耳尊治世同前也。已上二神御坐天宮而不下此國と記して其以下は合運圖に同し。去々屋代翁の藏本あり。文祿五年まであり。筆。○よよ一。まを免と云然れども。文祿年代記と稱ふなり。○よよ一本。只々玉代記と題せる書あり。忍穗耳尊より上を合運圖に同く。彦火瓊々杵尊元年己巳。三十一万八千五百四十二

年。彦火々出見尊元年丁未。六十三万七千八百九十二年。葺不合尊元年己卯。八十三万六千四十二年。神武天皇即位元年辛酉正月一日。震且周惠王也。云々々あり。去々温故堂此代。後土御門院を當今帝とあれ。去々群書一覽あり。和漢編于を。文正本玉代記と云々。去々支合圖一卷。正和四年。東福寺虎關和尚作と云る書あり。已いほぐ其書を見ざれど。此僧此元亨釋書あり。白山明神者伊弉諾尊也と云。此神の神語ある由あり。神世此年歴を載せり。小准牙と云。此書は凡々推量られり。其謂ゆる神語津嶋本。是神國也。國常立尊乃神代寢初國主也。次國狹槌尊。次豐斟淳尊。次泥土瓊尊。沙土瓊尊。次大戸之道尊。大苦辺尊。次面垂尊。惶根尊。次伊弉諾尊。伊弉冉尊。謂之天神七代。吾是伊弉諾尊也。今号妙理大菩薩。此神岳白嶺者。我主國之時都

○弘仁歷運記考下

九

城也。我乃日域男女之元神也。天照太神者。我子也。天忍穗耳等。我孫也。其子天津彦火瓊杵等。受祖天照太神勅降治此國。始爲地居。饗國三十一万八千五百四十二年。生彦火々出見等。饗國六十三万七千八百九十二年。生彦波瀲武鸕草葺不合等。饗國八十三万六千四十二年。是名地神五代。人王第一國主。神武天皇者。鸕草等第四子也。在位七十六歲。天皇年四十六。始登皇位。辛酉歲也。云々。此本此餘。伴信友亦本種々の妄説とて書抄けり。が合運圖を校せる。東寺此佛法和漢年代曆。尚と文明本。王代記。應安本年代記。永祿本倭漢合圖。凡と皆右此類なれ。神武天皇以上此合運を總て無用此長物のみと知る。然れど此御世とて。以來此事實を擧之。故中。各々採。用ふ。爲き事等も少。故其取々。異聞。比較。校。信。友。の。囁。み。し。り。ば。其。藏。本。此。合。運。圖。を。採。扱。神。世。此。紀。年。小。如。加。さ。る。校。は。己。が。本。小。と。寫。し。取。扱。此。亦。と。苦。心。せ。ゆ。由。也。前。に。撰。寫。依。古。史。成。文。此。年。歷。編。を。著。

さむと欲せる故の擧なれど。上件此書と。一部も取依り。足も此無れを止。こを校得。交。赤縣此歷年は。春秋命歷序と。竹書紀年と。校參攷し。皇朝の紀年を。日本書紀と。是。歷。運。記。を。訂。正。し。彼。此。參。伍。合。運。し。て。新。し。古。史。年。歷。編。を。作。れ。り。但し其編り。國常立尊。豐斟淳尊を。本世より立て。以。國。狹。槌。尊。といふを。除。去。さ。る。由。也。古。史。徵。り。論。ひ。泥。土。煮。沙。土。煮。尊。大。戸。道。大。戸。邊。尊。面。足。惶。根。尊。と。云。ふ。を。本。世。より。立。さ。る。由。也。古。史。傳。ふ。云。牙。少。斯。て。此。歷。運。記。考。を。年。歷。編。の。附。録。年。歷。編。を。彼。古。史。此。附。編。な。れ。を。推。古。天。皇。此。御。世。より。筆。を。止。せ。り。是。を。後。を。あ。ま。し。紀。年。書。小。抄。な。て。見。る。由。也。因。り。謂。ふ。其。紀。年。書。類。此。和。漢。

合運せるが多う依中、小體裁を記す。和漢歷代帝王備考といふ十卷此書あり。撰者此實此姓名を知らぬ。聚齋先生云ひし人。吉田光由が合運圖を參補して、此書を作れるを記し、其門人。小山前定と云ふ序を見え、貞享三年丁酉、茂記し、其四年、小梓行せし書なり。然る末、華陽書肆、寺田重徳、小篠正昭、杉原正範、梓行せし書あり。然る俗を右此序を去り、書名を改め、後人此、次々小増益形と去て、撰者の真面目、浅失ひと依本ど、多うれど、其はわろし、舊板を索む、原し、はと近く寛政八年、小出と依、和漢年契と云書も、便宜き物あり、學者の如ら、是此等此書を畜ふ、但し、上り此校せる、舊き合運圖類を更なり、此書等小も、天神七代地神五代と別けて、稱題せし事あり、中、世より此誤を、受來れる、ふて、非あり、此を曾て、古昔、如く、交妄稱れること、先師の委曲、辨、不、論、し、れ、多、る、が、如、し、其、古、事、記、傳、は、と、鉗、狂、人、此、書、如、ど、を、見、し、

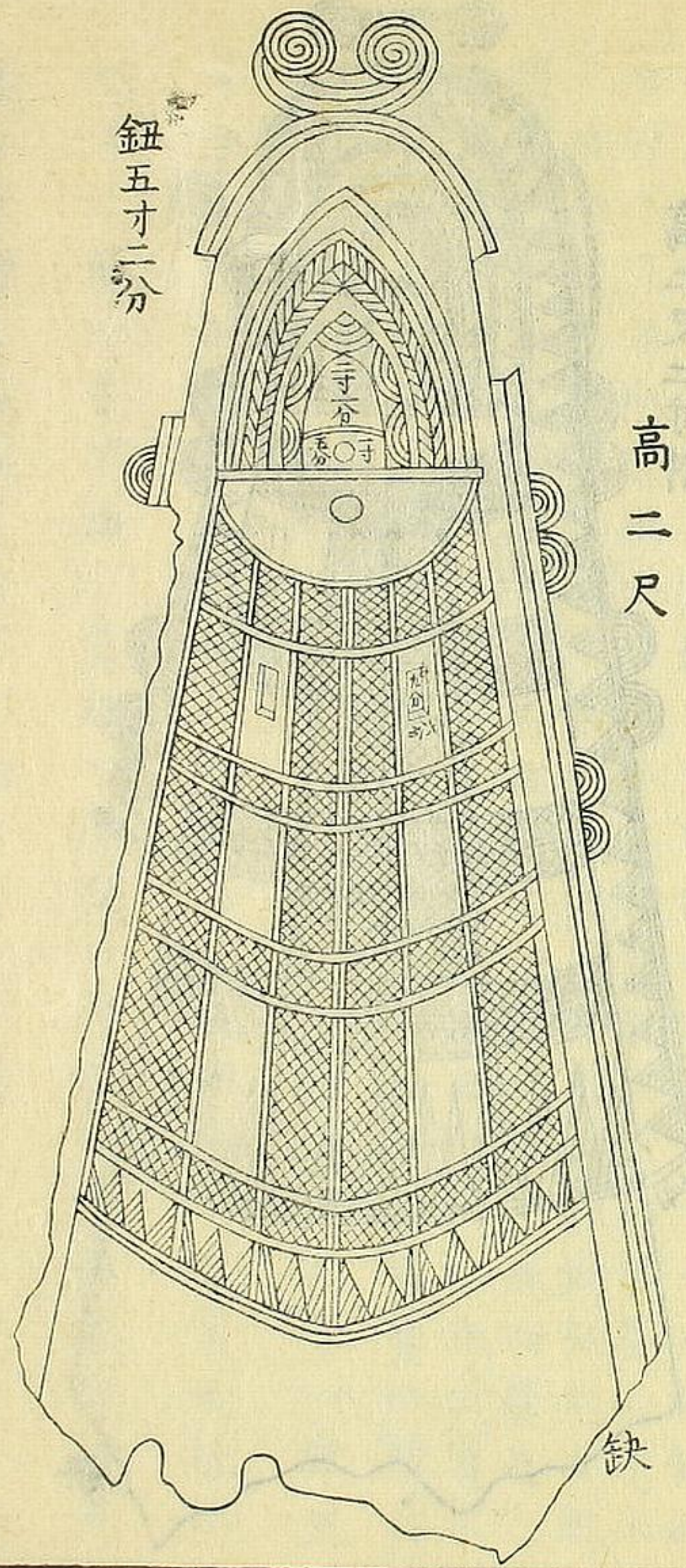
○上、件、皇、美、麻、命、此、天、降、坐、ぎ、依、以、前、大、國、主、神、の、御、世、小、は、世、間、の、風、俗、大、く、開、々、と、万、物、此、事、物、之、形、備、は、れ、也、と、云、ふ、説、り、想、ひ、合、次、登、き、事、此、有、る、を、因、よ、ま、し、小、附

録して、我が按ふ、論、ひ、定め、て、人、を、と、し、左、海、右、ま、れ、其、當、否、は、神、小、質、し、賜、ら、む、と、欲、る、形、あり、其、を、ま、於、扶、桑、略、記、天、智、天、皇、七、年、此、所、り、正、月、十、七、日、於、近、江、國、志、賀、郡、建、崇、福、寺、始、令、平、地、掘、出、奇、異、寶、鐸、一、口、高、五、尺、五、寸、又、掘、出、奇、好、白、石、長、五、寸、夜、放、光、明、云、々、と、云、依、事、あり、此、云、々、と、約、と、此、掘、出、と、る、小、を、佛、法、此、異、驗、と、や、所、思、と、り、と、む、天、皇、御、自、ら、御、身、傷、ひ、後、して、佛、子、供、養、し、給、り、る、事、小、見、る、を、悲、し、く、思、々、去、く、思、は、後、と、元、明、天、皇、紀、り、和、銅、六、年、七、月、丁、卯、大、倭、國、宇、太、郡、浪、坂、郷、人、大、初、位、上、村、東、人、得、銅、鐸、於、長、岡、野、地、而、獻、之、高、三、尺、口、徑、一、尺、其、制、異、常、音、協、律、呂、勅、所、司、藏、之、嵯、峨、天、皇、紀、云、弘、仁、十、二、年、五、月、丙、午、播、磨、國、有、人、掘、地、

獲一銅鐸。高三尺八寸。口徑一尺二寸。道人云。阿育王塔鐸。清
 和天皇紀云。貞觀二年八月十四日辛卯。參河國獻銅鐸一。高
 三尺四寸。徑一尺四寸。於渥美郡村松山中獲之。或曰。是阿育
 王之寶鐸也。あども所見とゆ。右四枚の銅鐸のちある何れ
 る人。或説り。今現る。大和國吉野山。豐臣太閤此手書此添
 たる銅鐸あり。天此半ちやくを呼も此。右中此一あらむ。
 と謂ふれど。此を信られ。其を其謂ゆる。天此半ちやく此
 圖を見る。右此記録ども云。其尺寸異ふればれ少。
 豐臣太閤の手書此文。武ゆうたつし。手がら先此若も此
 をハ。汝が事。いと武かう。杖法くをを。當座のほうび
 として。天の半ちやく。何とうるもの也。八月日邑下判源藏
 左とあり。半ちやく。半ちやくを。實鐸の轉訛ある。其圖左

此の
とし。

高二尺



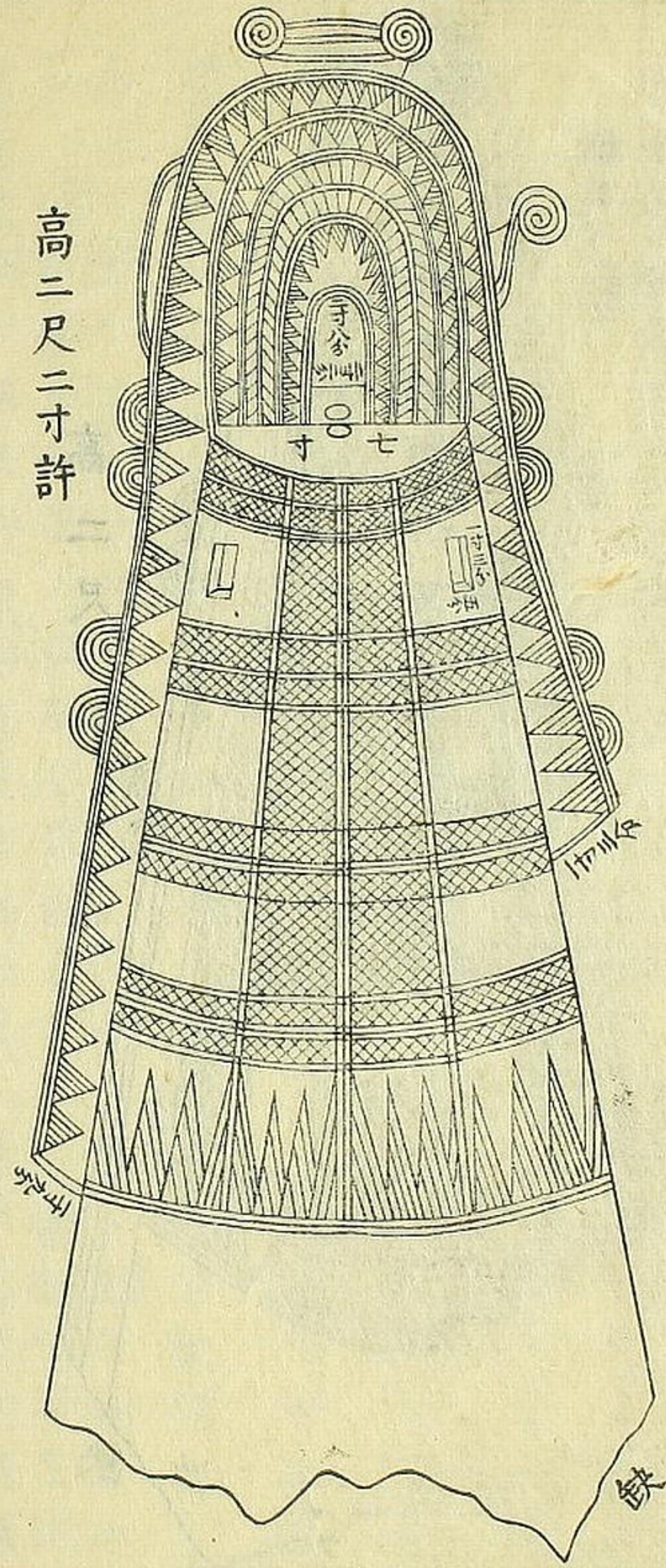
缺

然、近世、國々より、時々、古を掘、出せる事あり。各其形、
 状、大小、異ふ。己が見聞、及、考る。正し、其限、を記さむ。

○弘仁歷運記考下

○十二

寛政二年三月。播磨國宍粟郡葛庄。須賀村の山中より掘獲
 せる銅鐸あり。此を我が相識れる。山田安貞と云人の所藏
 あり。其圖左に如し。

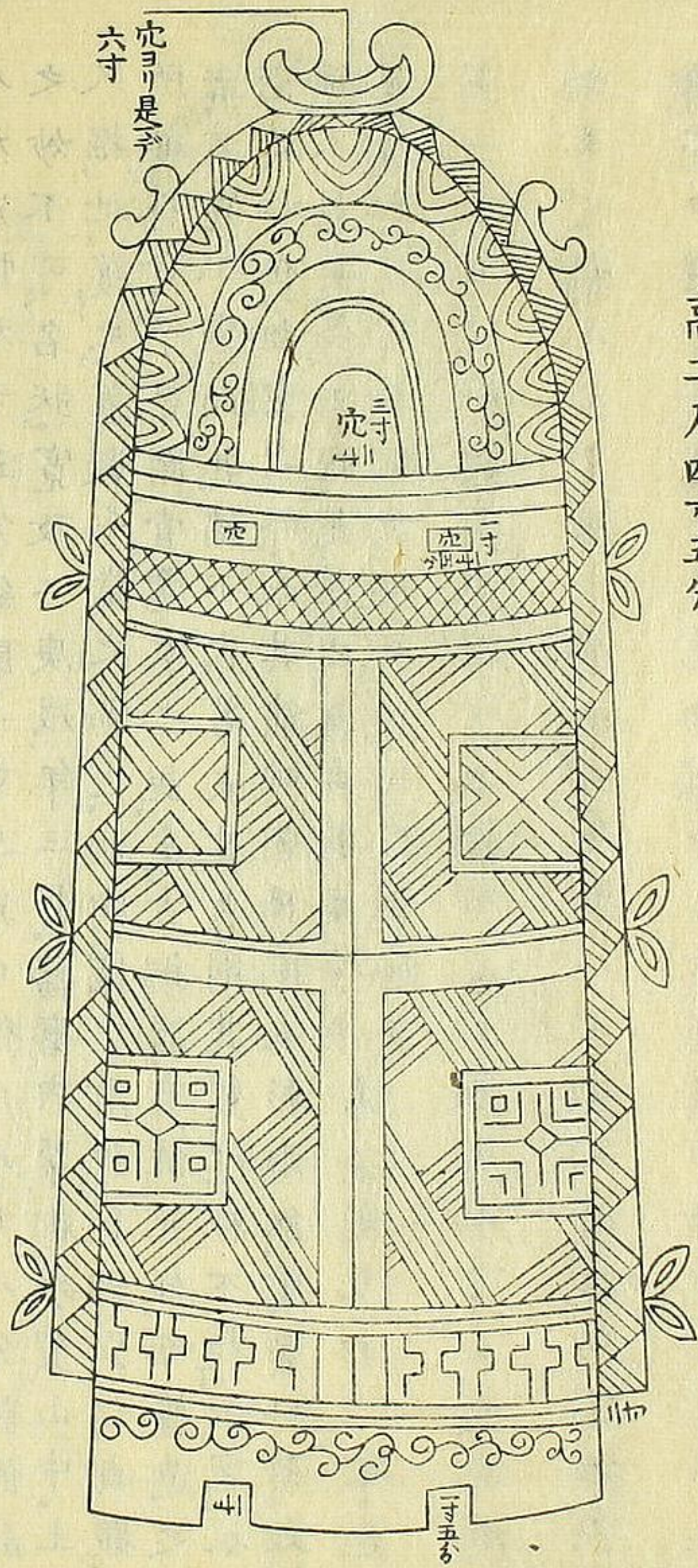


高二尺二寸許

山田氏古宝鐸記云。右高三尺餘。口徑一尺餘。重四貫八百目。
 蝨蝕腐爛不可量。今隨其缺損量之。高二尺二寸許。紐高一尺
 八九分。幅九寸五分。緣闊一寸五分。口徑一尺七八分許。飾紋
 之妙不可名。狀寬政二庚戌年三月。播磨國宍粟郡須賀山中。土
 人掘地獲之。蓋數千歲之物也。而與國史所記和銅。弘仁貞觀
 所獲符合。予曾聞賞鑒家之說矣。古銅器有依元樣而贗造之
 者。其質不密。而其鏽不古。若夫其真。則其質似粗。不粗。似密。不
 密。其妙在粗密之外。而其鏽映朝陽。則五彩爛然。電製虹臍。炫
 耀人目。莫得正視。是謂之真古物矣。今之
 所獲。與其說合。則其物之古。可得而知矣。
 萬曆文化十一年五
 月十七日。同國佐用郡下本郷村より掘出せるも。大抵同
 形にて。稍小あり。萬曆寛政四年閏二月。參河國渥美郡神戸
 郷。谷口村と云處より。三枚掘出せり。其圖を見ゆ。一は山
 田氏此を大抵相似す。高さ三尺四寸。重さ九貫目とあり。餘
 の二枚此圖左の如し。

寛政四年閏二月三河國渥美郡谷口村所出

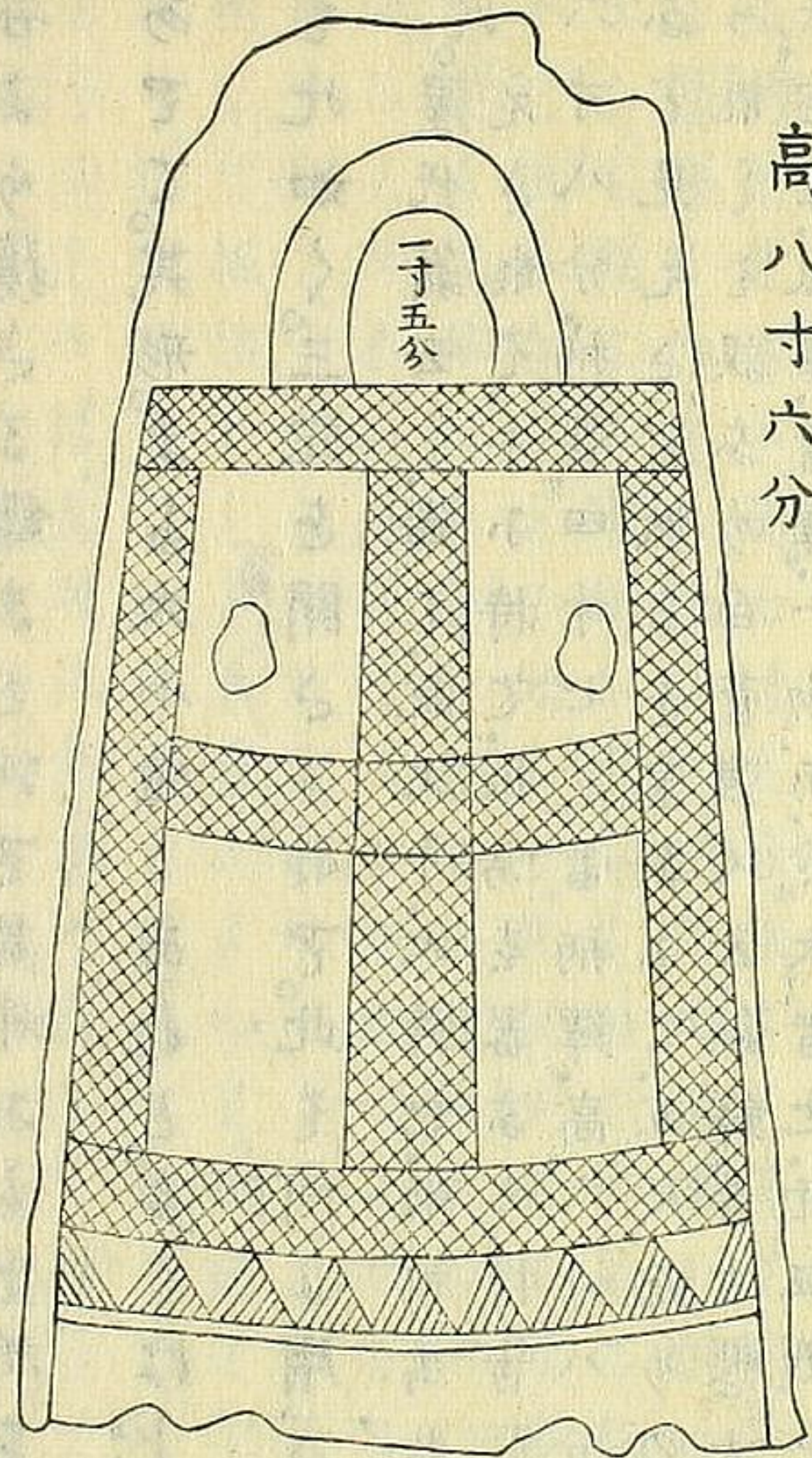
高二尺四寸五分



重サ八貫目

同上

高八寸六分



分五寸六徑

後之此後。同十年此十二月。同國額田郡洞村よで掘出せり。と云ふも。大抵山田氏の空相似とて。右播磨國のと。參河國のとは。御紀よ載され。處は。同國にて。うね參河國を。郡も同じ。渥美あるが由ありて聞え。殊に村松と谷口とは。一里許り隔れる所なり。と聞え。亦此屋代翁此。見聞り及むれし。古銅鐸の圖どもふ。明

和九年小。遠江國佐野郡長谷村より出たる鐸。まゝ安永六年小。河内國の郡を知らず。寺臺村と云よ。掘出たる鐸。まゝ享和元年八月小。遠江國白須賀驛の近交山よ。掘出せる鐸三枚。丈政八年九月七日小。伊勢國壹志郡下川口村の東。風呂谷より獲たる鐸ふと云。其外小も。出所を知らぬ五六品あて。其形。まゝ大小種々あれど。多くは上小出せる鐸ども。此如く。三穴を開たる也。此を何よ用と云。器り。詳あらぬ。屋代翁云く。鐸と説丈。大鈴也。兩司馬執鐸と見鳳鐸。高六寸八分。柄長四寸七分。雷柄鐸。高六寸八分。柄長三寸八分。あど見えと云。然るを皇朝小て。五尺餘りの鐘を鐸と名付られしと誤り。白菅漁父云。銅鐸。昔古懸。大伽藍之四隅。又云。宝鐸。風鐸。擔鐸。一物。而鈴。大者也。元征戰之調度。后

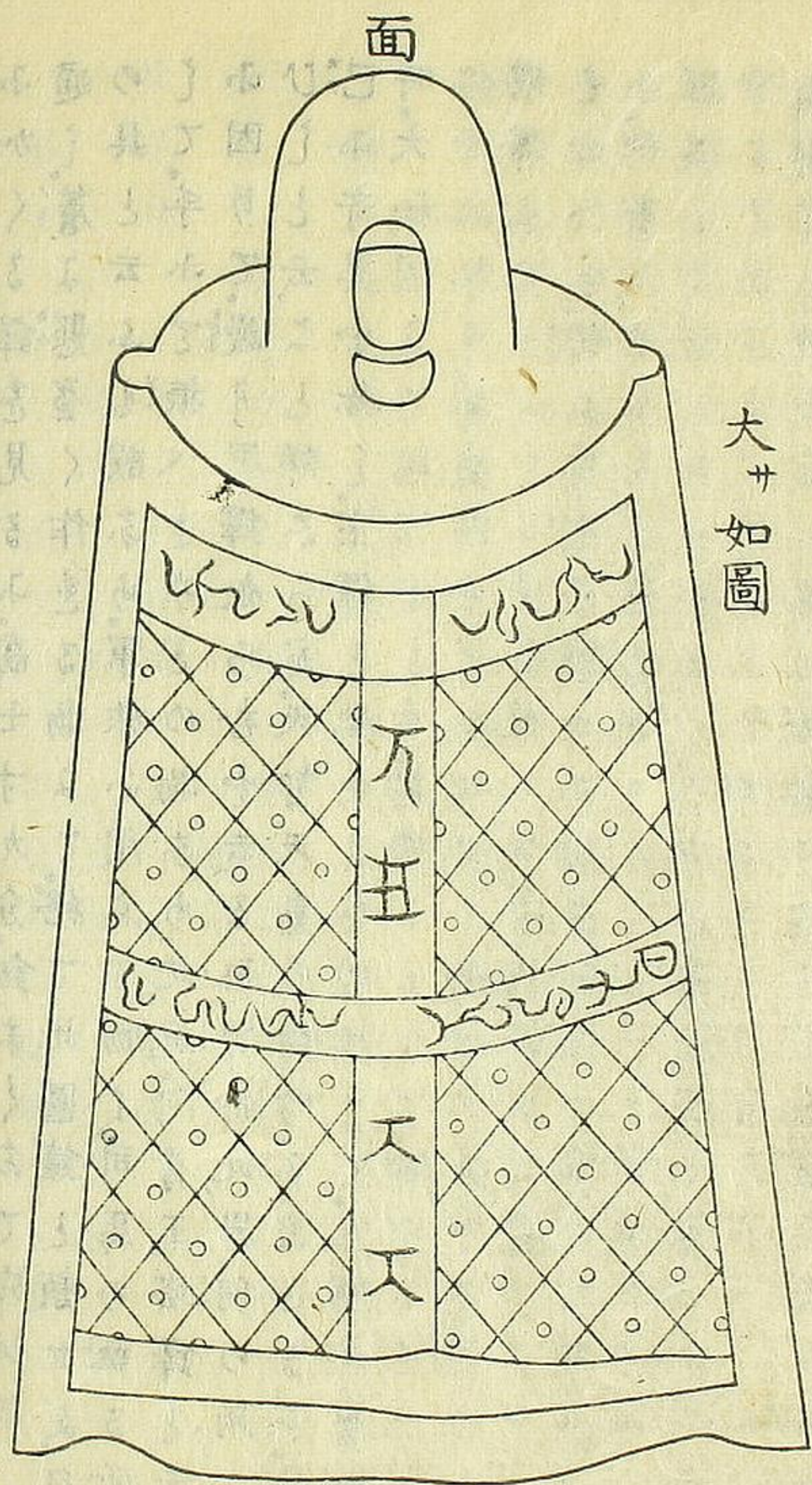
以為佛器と云へれど。風鐸も。區ある物小非也。京の八坂塔小かくる鐸を見る小。高七寸九分。鈕小く。あて穴也。舌を通し。簷小懸。なく。作まる物よ。絶て此。區鐘と類せ。征戰の具と云ふも。誤り。軍旅小用ふる物也。司馬の執る所よ。して。手小て。振べき。などの物あり。此。説阿育王塔鐸と云。小因りて。説り。風鐸。此らむを云。取也。抑此。器。何の用小用ひしと云。こと。詳あらぬ。天智天皇の御時。出たるを。當時已小奇異を稱し。宝鐸と稱せるを。始めりて。元明天皇の御時。大和國よ。掘出せし。其。質小より。銅鐸と記され。弘仁十二年。播磨國。りて。掘出せし。時。道人ありて。阿育王塔鐸。ふと云。し。ら。貞觀二年。參河國。よ。獲たるを。然そ云へ。阿育王塔。あり。其。塔。露盤。を。ふく。て。中。り。懸。鐘。あり。地。中。小。阿育王塔。あり。其。塔。露盤。を。ふく。て。中。り。懸。鐘。あり。地。中。埋没して。能く。知る者。あり。と云ふ。事の。有るを。以て。此。器。地中よ。出せられ。阿育王の鐸。形也。と云。依ふるべし。右の區鐘ども。銑。間。ま。の。舞。上。鼓。鉦。の。辺。に。穴。を。穿。ち。或。を。切。欠。とる。と。律。呂。を。調。ふる。多。め。り。せし。事。と。見。ゆ。れ。ど。統。紀。に。律。呂。小。協。ふ。と。云。る。を。合。せ。考。ふる。小。此。器。も。也。音。律。の。と。免。小。制。せ。る。物。あり。然。も。有。る。と。云。は。て。其。出。たる。時。を。詳。ら。ん。と。上。野。

○弘仁歷運記考下

○十五

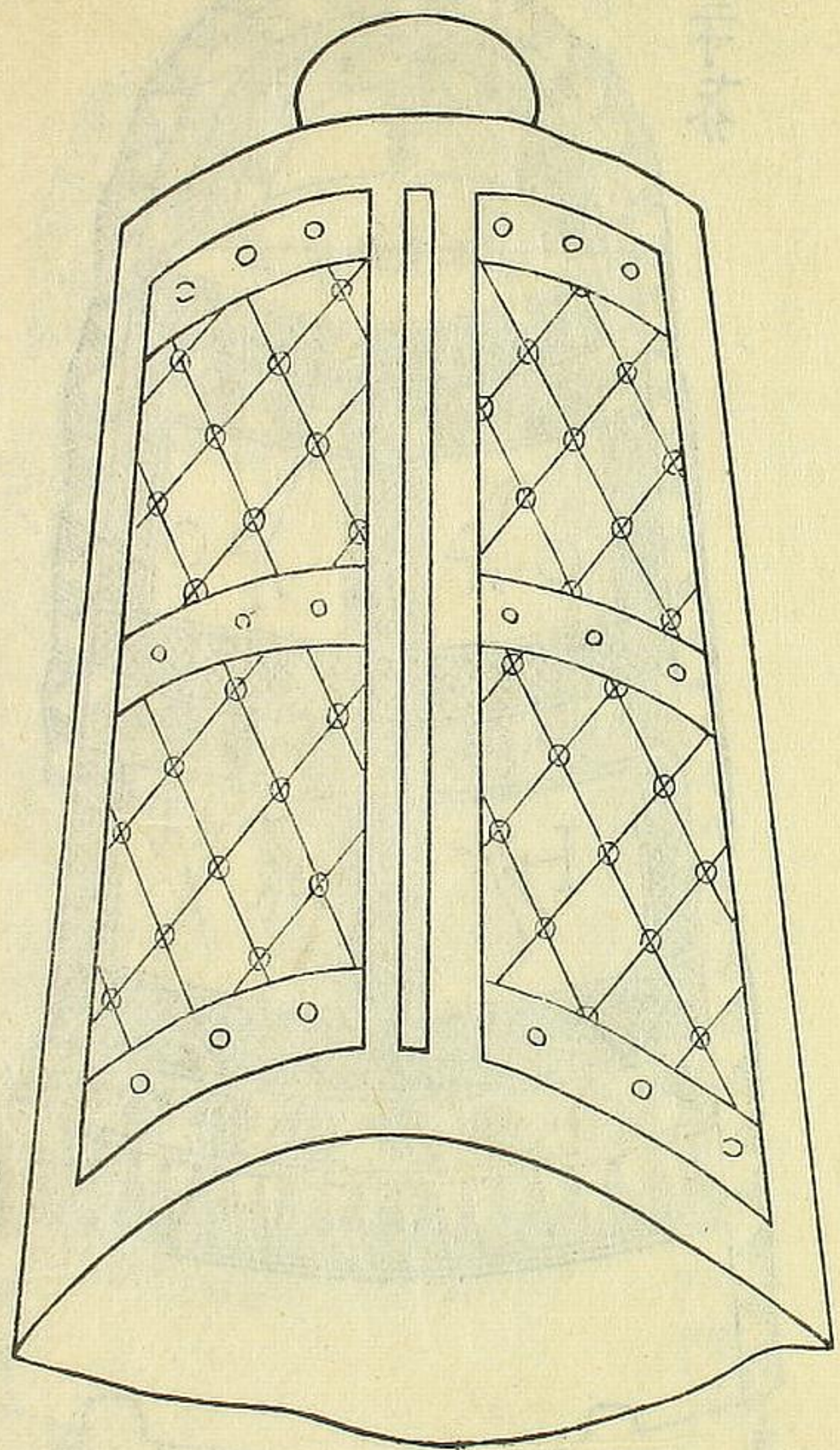
國綠野郡落合村に在り。七興山宗永寺境内の古墳より掘獲
 せりと云ふ銅鐸也。其形状左に示す。

大サ如圖



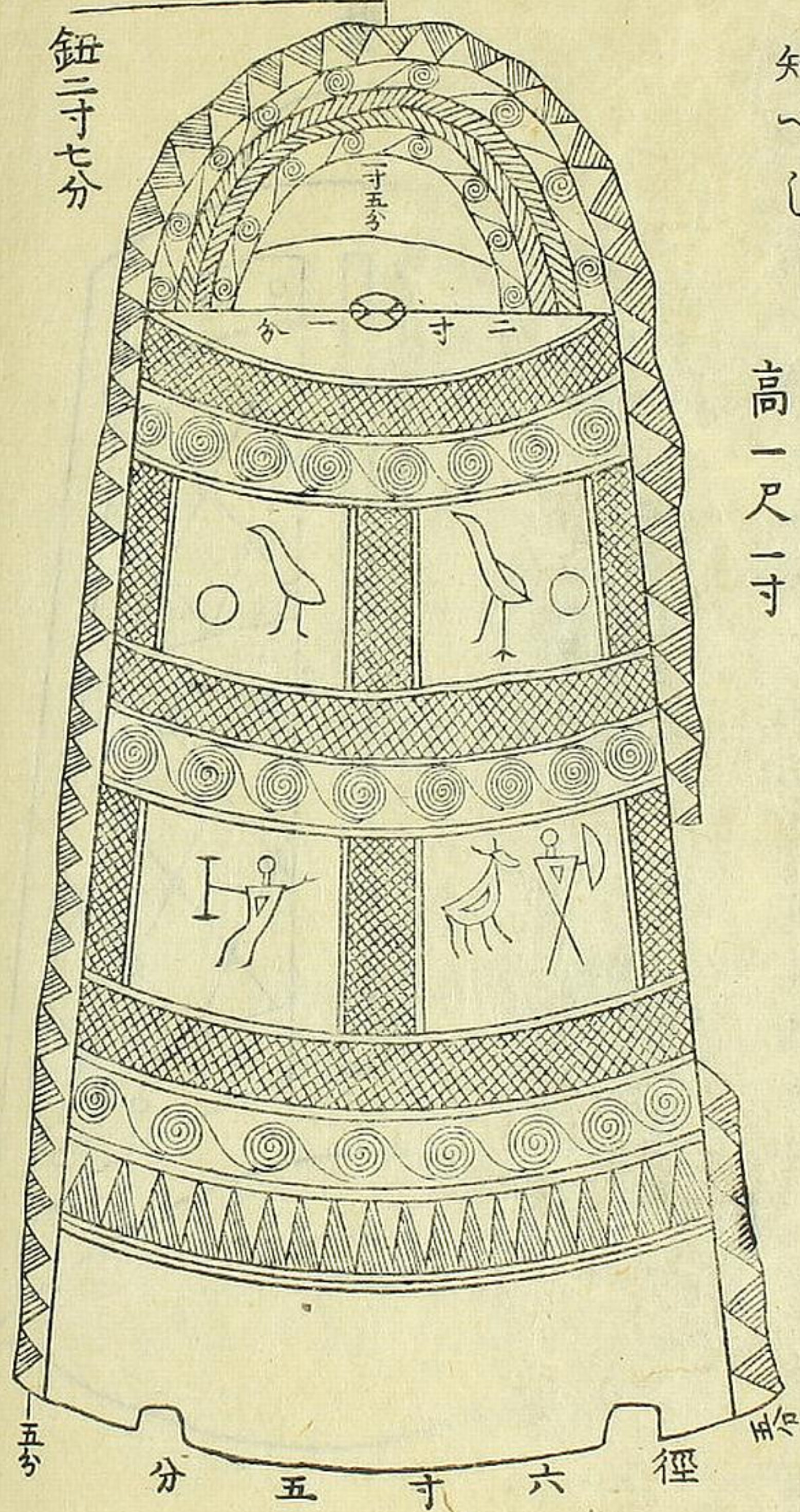
面

背

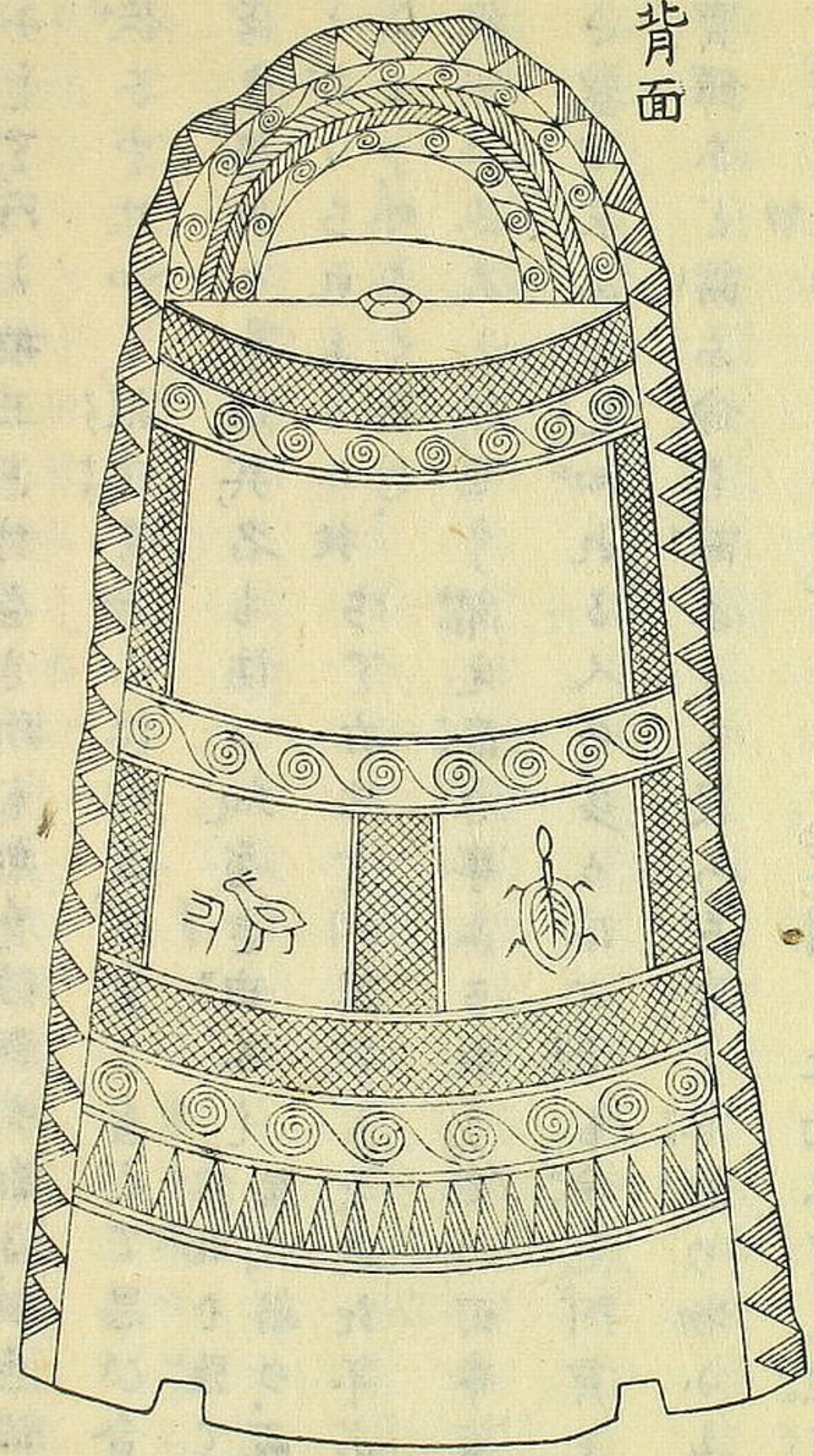


此は上件の鐸ども小も相似ぎは古物あるが其鑄付とる
 文様古文字小髣髴とす。斯て此器のみ例に穴あきは若く
 は異品あるう。はと谷文晁の所藏ある古銅鐸と正の上は

鐸等と同じ類ひて。三穴あり。高さ一尺一寸ふして。人偲と
 牛馬龜鳥など此。略形を鑄付とゆ。文字まは物の形を画こ
 等ふても。知べし。高一尺一寸



背面



ちて右の古器とも。舊く鐸と稱ひ來れる故。今も姑ちて
 謂ふふれど。神典ふは。奴互まは佐那伎あぞふ。此字を用ひ

とて其の形相類する故と聞えとて。奴氏を奴理氏の
小見え佐那伎の事古語拾遺は上件此器どもは其形
見えとり共師此記傳小説あり。此銅器どもは其形
小して内よ振玉を付る所も無きは神典にる。奴氏佐那
伎あぞ此如く振鳴物小は非だ古書よ。あえて思ひ合
彦き事れりせば其名もはと知る由ふし。然れを強て
と名けられたる小徒。ちて右此古銅器どもを近紀年
ふより外あくれむ。ちて右此古銅器どもを近紀年
掘出と依おとは。世り聞え高き事ある故り。世此好
と鑑定家あぞ見知れる人の多う依お古も今も阿育王
寶鐸あど謂ふ倫を論ふりも足らだ實を赤縣の物小も非
だ。天竺此物りも非だ。はとよし其國く此物あてと強言に

ともかゝ依物の然ばう正多く其國くより渡り來れる例
なく。はと皇國上代此器あつと云むを欲るふ。神武天皇以
來世り有來し物の様形ら以て是を以て彼鑑定家まに世小
物識と云依人とも定め厭倦て前世の物此土中埋れ
遺ま依あてを事おげ小言ふを其前世とは何時を謂ふ
と問ふ。彼佛書ある。三災の世此事先きたる説云ひ出
依よ正外あく。今小其説定まる事あし。佛書の謂ゆる三災
度藏志の大千世界品を委然れど此銅器此み小非だ諸國
く説明せるを見るべし。然れど此銅器此み小非だ諸國
の古冢まに丘あど此崩れて和あら以漢形らだ。天竺あら
ぬ鏡鈴をはじめ古器古物の出と依例數ふる小違河原

其品々故畜ふる人多うきぞ。彼銅器を始め。然る物ども此
中。小大國主神の御世。此物あるが。彼國避此後を。世了廢ま
て。遂に土中。小埋は。或を彼大神の御世。亦てし人の冢。小
收。之。依物。亦。此。現を。依。べき。運。河。て。時。く。小。出。依。亦。て。り
ゆ。其。右。出。せる。銅。器。も。の。因。を。熟。し。視。よ。天。祖。降。臨。よ
は。亦。事。痛。う。矢。視。ゆ。め。其。和。り。こ。そ。古。祿。て。見。ゆ。れ。
漢。へ。て。知。る。べ。し。其。を。譬。牙。ば。高。天。原。よ。て。天。神。の。造。ら
准。へ。鏡。は。鐵。を。鍛。へ。て。其。隨。磨。き。用。ひ。し。を。天。國。主。神。此。御
世。よ。有。り。む。と。想。ふ。鏡。を。白。銅。の。合。せ。金。字。八。花。形。亦。ど。種
種。の。象。も。有。れ。ど。水。銀。を。も。て。光。を。磨。り。て。作。れる。を。國。神。此。御
玉。亦。然。る。類。も。有。れ。ど。煉。玉。亦。磨。り。て。作。れる。を。國。神。此。御
玉。抑。る。の。備。付。理。ま。ご。白。銅。れ。ど。の。類。此。巧。亦。依。舉。げ。も。は。皆
近。き。世。り。外。國。の。わ。ざ。小。習。へ。る。事。の。之。人。を。思。ふ。め。き。ど。

か。依。事。ども。大。汝。少。汝。神。此。御。世。よ。蚤。く。給。へ。る。を。
昔。よ。以。來。ま。ご。次。く。外。國。よ。其。わ。ざ。も。を。再。傳。せ。し
ある。こ。と。已。慥。り。稽。牙。得。る。説。等。ゆ。れ。ど。其。を。再。傳。せ。し
さ。し。玉。り。ま。れ。鏡。み。ま。き。其。物。を。見。ま。せ。古。物。を。再。傳。後。の。物
う。知。る。よ。と。古。刀。を。新。刀。の。拔。放。ち。て。手。小。執。ま。せ。銘。を。見
依。して。忽。り。其。新。古。を。見。別。る。と。同。じ。道。理。亦。上。り。出。せる
宝。鐸。記。の。謂。ゆ。其。真。則。其。質。似。粗。不。粗。似。密。不。密。其。妙。在。粗
密。之。外。云。く。此。妙。中。く。小。言。は。益。を。べ。く。も。非。交。さ。れ。ど。ま。抄
此。意。ぞ。へ。と。學。問。の。力。と。を。合。せ。て。其。世。の。古。物。を。鑒。定。む。べ
し。已。さ。る。心。定。ま。り。拾。ひ。獲。ち。る。物。ま。ご。贖。故。是。を。以。て。い
ひ。得。る。物。も。二。品。三。品。は。藏。ち。て。在。る。也。故。是。を。以。て。い
や。古。く。天。智。天。皇。此。御。世。よ。夢。で。小。奇。異。と。稱。して。佛。法。の。異
驗。と。さ。牙。所。思。看。し。彼。和。銅。六。年。よ。掘。出。た。依。時。も。世。よ。知。る
人。亦。く。其。製。の。常。小。見。る。所。の。唐。物。と。は。異。ある。を。上。り。も。珍
し。た。物。を。見。行。して。所。府。小。は。藏。免。給。ひ。む。此。等。の。事。を。も

思ひ通して。上件論牙依説の意を。曉正秘々し。或人まよ云
昔も金銀銅など出たる事なく。和銅の御世より始めて銅
を掘得たりと云ふ。其よ也。鏡鐸鈴などをし。昔も作れり云
世より。心を得る。金の有る。鏡鐸鈴などをし。昔も作れり云
男神の外。国々を巡り。見給ひし。時より。韓。國。よ。金。銀。あり。我
子。此。治。ら。ば。國。々。を。巡。り。見。給。ひ。し。時。より。韓。國。よ。金。銀。あり。我
る。る。き。木。も。伐。生。し。給。へ。る。は。御。喬。の。御。く。世。ひ。て。舟。り。作
金の取りて。用ひし。め。給。む。此。神。慮。あり。故。り。大。國。主。神
の御世より。其。御。教。の。ご。と。舟。を。物。して。彼。邦。の。金。を。取。來。て
用ひ給ひし。あり。斯。て。此。天。神。の。御。子。に。御。世。と。い。は。れ。て。御。誨
哀。天。皇。の。御。代。ま。で。然。る。事。の。無。記。し。伐。是。御。世。と。い。は。れ。て。御。誨
あ。で。て。神。功。皇。后。御。自。ら。韓。を。征。と。ま。ひ。是。よ。也。は。と。彼。處
此。金。を。用。ひ。給。へ。る。は。和。銅。に。至。り。て。始。め。て。御。國。より。銅。を
出。し。其。後。も。金。銀。を。更。に。有。り。て。諸。金。方。國。に。比。類。あ。き。ま
て。掘。出。る。事。と。成。ぬ。る。は。都。て。神。の。御。心。あり。然。れ。ど。大。國
主。神。の。御。世。に。諸。金。の。多。く。有。り。し。事。を。も。何。ら。疑。は。む。此
布。師。此。玉。勝。間。子。出。され。し。依。讚。岐。國。の。山。此。谷。ある。怪。し。記

彫物の類ある事ども。國々みこゝら聞え。まよ國々此。或そ
石窟。何るは巖壁あざふ。此。世。よ。ら。為。文字。依。多。は。物。の。象。象
とを。人。舉。あ。ら。ば。彫。付。さ。る。所。も。あ。く。か。し。こ。有。り。て。諦。り
聞。定。め。し。依。事。も。何。く。き。き。有。る。を。其。何。ま。れ。著。以。書。此。
因。何。ら。む。時。く。み。を。記。し。出。さ。む。此。等。も。多。く。は。大。名。牟。遲。少
名。牟。遲。神。此。御。世。の。物。も。亦。有。り。依。

○此。此。歷。運。記。考。も。い。ふ。し。天。保。二。年。と。い。ふ。年。此。秋。の。半
よ。也。冬。ま。ど。小。草。稿。畢。れ。る。を。今。年。迄。と。取。り。出。て。更。り。按
を。加。す。て。清。書。せ。し。め。し。依。依。也。天。保。七。年。の。い。ふ。年。此。去
も。月。此。十。日。あ。は。れ。五。日。此。日。葦。原。一。夫。平。篤。胤

葦原のむとめ成徳のひを言曾富騰とて有。

知る人もれし。よしう阿しのは。

おは此、不ぞ四十とせ許で。う死れく交を正々依學びの
友ふ。十年ばうであふと。著せる書ども見せけるふ。甚く
嫌ひて。いと異しに學ぬゆをて。此人うさ牙棄られぬ
依事此。う初てかく有らむを思ひた。も。且は悲しく。
かおを憤ろしくも覺えしは、ふ。字成を自ららかく
け。ほとろく。歎まも出ぬ依あて。

信	殿	談	菴	郡	京
質	人	交	珥	尔	利
背	松	氏	旅	緑	還
伊	井	兄	乍	有	尔
那	美	弟	毛	氏	此
路	澄	須	善	取	乃
里	麻	接	友	假	信
長	績	在	登	尔	濃
原	里	波	常	宿	國
信	長	飯	波	在	乃
好	北	田	往	旅	伊
何	原	乃	還	能	那

○弘仁歷運記考跋

一

申ミラレ 聞ミ 登ト 在アル 業ワザ 談カタラ
乎斯 如カ 誘イガナ 可ベ 耶ヤ 婆バ 聞ミ 已カノレ
 聞キコ 此ク 尔ニ 布フ 志シ 實ミコト 尔ニ 先マツ
氏佐 比ヒ 奈ナ 美ミ 澄スミ 不タユ 猶タ 豫ハズ 祖オヤ 乃ノ 久ク 邪ケ 良ラ
 諾ウバ 將ヨケム 善ム 大ウ 人ニ 乃ノ 御ミ 許モト 尔ニ 取トリ 信ニ 好ヨミ 毛モ 相アヒ 口ク 會チ 西ア 伊イ 射ガ 子コ 斯シ 乃ノ
氏佐 比ヒ 奈ナ 美ミ 澄スミ 毛モ 信ニ 好ヨミ 毛モ 相アヒ 口ク 會チ 西ア 伊イ 射ガ 子コ 斯シ 乃ノ

氏シ 百モ 部ト 登ト 御ミ 書フ 波ハ 雖アレ 有ド 此コレ 乃ノ 弘ノ
 仁ニ 歷リ 運ウ 記キ 考カウ 乎フ 清キヨ 書ラ 爲ガ 爲キ 氏シ 斯ス 與アタ 賜ヘ
 都ツ 故カレ 頂イタ 令キ 荷モ 禮レ 信シ 質シ 伊イ 進ス 毛モ 不シ
 知ラ 尔ニ 退シ 毛モ 不シ 知ラ 尔ニ 受ウ 賜ケ 利リ 恐カ 利リ 麻マ
 受ウ 賜ケ 利リ 歡ヨ 都ツ 都ツ 立タ 舞マ 乎フ 美ミ 澄ス 母モ 信シ
 好コ 毛モ 同コ 心カ 志シ 阿ア 奈ナ 奈ナ 比ヒ 扶タ 氏シ 頓ヤ
弘仁歷運記考跋
三

其^{ソノ}彼^{カノ}櫻^{サクラ}木^キ 爾^ニ摸^{ウツ}令^{エラ}鐔^セ 氏^テ大^ウ人^シ 乃^ノ
 御^ミ庫^{クラ} 尔^ニ納^{フサム} 波^ハ留^ル 伊^イ專^{モハラ} 信^シ 質^シ 我^ガ父^チ 乃^ノ
 心^{ココロ}乎^ヲ 心^{ココロ}登^ト 爲^ス 留^ル 孝^{コウ} 養^{ヤウ} 乃^ノ 此^{コノ} 功^イ 績^サ 乃^ノ
 毛^モ 在^{アリ} 氣^ケ 阿^ア 奈^ナ 米^メ 傳^デ 多^タ 此^{コノ} 書^{フミ} 伊^イ 世^ヨ
 尔^ニ 廣^{ヒロ} 婆^ハ 基^ゴ 良^ラ 古^コ 學^{ガク} 夫^フ 人^{ヒト} 乃^ノ 爲^{タメ} 波^ハ 尔^ニ 更^{サラ}
 耳^{ミミ} 在^{アリ} 漢^{カン} 轉^{テン} 留^ル 須^ス 頑^{カン} 人^{ヒト} 毛^モ 佛^{ブツ} 齋^{サイ} 布^フ 加^カ 癡^シ
 留^ル 須^ス 頑^{カン} 人^{ヒト} 毛^モ 佛^{ブツ} 齋^{サイ} 布^フ 加^カ 癡^シ

人^{ヒト} 毛^モ 吾^{ワガ}
 皇^{スメラ} 大^{オホ} 御^ミ 國^{クニ} 波^ハ 神^{カミ} 乃^ノ 眞^{マコト} 名^ナ 子^コ 乃^ノ 御^ミ
 國^{クニ} 登^ト 爲^シ 氏^テ 萬^{マン} 國^{クニ} 能^ノ 本^{モト} 國^{ツクニ} 祖^{オヤ} 國^{グニ} 登^ト
 寂^{イヤ} 先^{サキ} 立^{タチ} 天^テ 物^{モノ} 毛^モ 事^{コト} 母^モ 成^{ナリ} 整^ト 在^{ナリ} 之^シ
 故^{コト} 實^{アト} 乎^ヲ 是^{コレ} 乃^ノ 書^{フミ} 尔^ニ 見^ミ 驚^{オドロ} 伎^キ 聞^キ 恐^{カシコ}
 美^ミ 他^{アタ} 國^{クニ} 尔^ニ 無^タ 比^ヒ 伎^キ
 氏^シ 他^{アタ} 國^{クニ} 尔^ニ 無^タ 比^ヒ 伎^キ

○弘仁歷運記考跋

○四

而タ在リ 斯シ遠ト津ホ神カ代ヨ乃ノ歷チヨ本ミ毛モ年ト
 小ラ治ハリ田ダ乃ノ大オ御ホ世ヨ由ユ千チ歲ト餘セ幽ア
 貴タ伎フト哉カ穴モ米ア傳ナ多メ伎デ加タ母カ抑モ
 布フ清キヨ伎キ御ミ民タ登ト化ナ歸カ奈ヘ麻マ阿ア那ナ
 悔ク改イ乃ノ祖オ祖ヤ乃ノ氏ウ門カ不ド穢ケ神ガ習サ
 朝ミ廷カ乃ノ貴タ佐フト辨サ悟キ氏ヘ異サ伎ト意コ乎ロ

紀ナ毛モ吾ワ翁ガ乃ノ神カ登ミ神カ高タ伎キ貴タ
 伎キ思オ兼モ利ユ佐サ太ダ加カ牟ム俱ク佐サ可カ
 尔ニ如カ斯ク之シ絲アラ來ハレ留ル事コト志シ波ハ
 天アメ尔ニ坐マ神カ地ク耳ニ坐マ神カ乃ノ御ミ心コ良ラ奈ナ
 斯シ故カ此コ由ヨ己シ毛モ一ヒ言コト加カ閑ヘ氏シ大ウ
 人シ乃ノ遍タ麻マ禰ネ久ク宣ノ賜タ夫ブ御ミ言コト乎ラ

○弘仁歷運記考跋

○五止

情ウレシ美ミ辱カタジケナ都ミ思オモ我ワ儘ト乎ヲ書カキ記シル志シ
 此コノ書フミ乃ノ後ノ尔ニ添ソ尔ニ布フ流ル奈ナ毛モ

江戸人
 岩崎長世

天
 水
 山
 海
 高
 貴

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六册 開題記五册</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 十六卷</small>	四秩刻成	○古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>初本 箱入</small>	一帖	○同 <small>挂軸料</small>	一枚
○靈能貞柱	二卷	○神拜詞記	一帖
○太元圖說 <small>石摺</small>	一幅	○古道學神号 <small>同</small>	一幅
○弘仁歷運記考	二卷	○神字日文傳	二卷
○皇國度制考	二卷	○祝詞正訓	二卷
○天津祝詞考	一卷	○古道大意 <small>講本</small>	二卷
○皇典文彙	三卷	○童蒙入學門	一卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○鑿宗仲景考	一卷
		○古今妖魅考	三卷

○刻成書目

○全

